BLEACH～天使の誓い～

沖田総司

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＢＬＥＡＣＨ～天使の誓い～

【Ｎコード】
Ｎ０２１８Ｑ

【作者名】
沖田総司

【あらすじ】
霊力を持つ少年、唯白亜希
亜希とその姉、２人の暮らしがある日を境に大きく変わる
死神に殺された亜希と姉
それは、一生心に残る悲劇
尸魂界で目覚める亜希
その後、強くなるために死神になる

斬魄刀も手に入れ、仲間や悲劇に会う亜希

亜希の運命は――――

第1話「死神との出会い」（前書き）

オリジナルキャラの登場
初の小説ですが、お楽しみください

第1話「死神との出会い」

時はいつも俺を追い詰める。それは、俺に居場所など無いと告げるように――――

姉「おーい！亜希こら、学校いくぞー！」
亜「・・・・今行く」
姉「はーやーくー！」
亜「今行くって・・・・」

姉に呼ばれて2階から下りて来た少年、唯白亜希。
中学3年・男。髪はショートの黒色。目は銀朱色と群青色。

亜（今日も、学校かぁ）
姉「レッツゴー！」

2人は自分の通う学校に向かった。ちなみに姉は、高校2年で、髪はロングの黒色。
目は黒色をしている。

俺は周りの奴らと違っていた。他の奴らは、黒く宝石のような目をしていた。反対に俺
は、銀朱色と群青色の目、凍り付くのではないかと言うほどに冷たい気を発していた。
周りの奴らは、そんな俺に近づこうとしない。そう、この目と冷たい気に恐れ・恐怖を
感じて近づけない。

亜（今日も、かぁ・・・）

今日も誰も俺に寄って来る奴は居ない。

亜「早く帰りたい・・・・」

亜希はそう呟きながら教室の窓から空を眺めた。
まるで、広い空をも怯えさせるかのように――――――

キーン、コーン、カーン、コーン

亜（・・・・やっと終わった）

亜希はチャイムが鳴り終わると同時に席を立ち、教室を出、玄関に向かった。そして玄
関・・・・・

姉「亜希～！」

亜「・・・・堂々と入ってくんなよ」

姉が堂々と入って来てため息をつく亜希。

姉「べっつにいいじゃな～い！」

亜「よくねえよ」

姉「それはさて置き、早く帰りましょ！」

亜「・・・・そうだな」

自由気ままな姉に呆れながら、亜希は姉と一緒に家へ向かった。

姉「あ！亜希亜希！また、幽霊居るよ！」

亜「いちいち騒ぐなよ・・・・」

2人には他人には言えない秘密がある。そう、幽霊が見えるのだ。
2人は昔から霊力が
あり、幽霊が毎日のように見えていた。しかし、見えるのは幽霊だけではなかった。

【グォォオォォオォ】

姉「亜希・・・・またあの怪物が・・・・」
亜「・・・・近いな」

幽霊の他に怪物、つまり《虚》・ホロウ・が見えていた。

姉「・・・・死神さん、来ないね」
亜「・・・・いずれ来るだろ」

死神の事も知っている。死神の事は遠くからしか見たことは無いが、虚を倒している事
は知っていた。しかし、その死神はまだ現れない。

姉「ねぇ・・・・探しに行かない？」
亜「・・・・その方が良いかもな」
姉「うん・・・・」

そして2人は死神を探し回った。

姉「あ！居た！」

そして、等々死神を見つけた2人。

姉「あの～、さっきあっちの方にいつもの怪物が居た・・・」

死神に話しかけた姉の声は途中で途切れた。亜希は目の前の光景に目を見開いた。なん

と死神が、姉を刀で斬ったからである。

姉「！！？・・・・・・――――――」

亜「姉さん！？」

姉は道路に血を流して倒れるとピクリとも動かなくなった。そこへ死神が言った・・・

死「テメエ等か霊力垂れ流して虚の野郎共呼びまくってんのは」

亜「！？」

死「テメエ等の所為で俺等死神は大変なんだよ。・・・・だから、ここで死んでもらうぜ、

ガキィ？」

亜「！！？」

死神は不適に笑い、恐怖で震えている亜希を見下した。

亜（このままじゃ、殺られる・・・！」

亜希は初めて震えるほどの恐怖を感じた。

亜（姉さん・・・！）

助けを求めたいが震えが止まらず声が出ない。姉の方を見ても、もう姉は死んでいる。

死「死ねぇ！ガキィ！」
亜「！！？」

死神は刀を亜希に向かって振り下ろした。
血が飛びかう、いつも青い空が赤く見えた。亜希は大量に血を流し、意識が遠のいてい
くのが分かった。手を伸ばせば、薄っすらと自分の手が見え、その血まみれの手を半分
以上閉じている目で見る。目で横を見れば、血まみれの姉。
最後に聞こえたのは、いかれた声で笑う死神の声だった。

心が沈む――――――――

［唯白亜希］
十五歳・男　髪の色：黒色　目の色：銀朱色、群青色
身長：１５８ｃｍ　体重：４８ｃｍ
誕生日：１２月１８日

第1話「死神との出会い」（後書き）

どうでしたか？
最初は、面白くはありませんが、次もお楽しみを！

第2話「闇と証」（前書き）

頭から離れない、いかれた笑い声
闇は亜希に近づく

しっかり読んでください

第2話「闇と証」

笑い声が聞こえる。それは、いかれたあの時の死神の声。
あの時の死神の声が頭から離れない。血が飛び、流れ、血まみれの俺と・・・姉。・・・姉さん・・・
もう、あの笑顔を向けてくれる事は無い。俺も姉さんも死んだ・・・いや、殺された！
死神の手で・・・！

許せない、俺の光を奪った死神が！
許せない、俺の居場所を奪った死神が！

死神が許せない――――――――

亜「・・・・・んっ・・・？ここは・・・」

亜希は今、野原に寝っ転がった状態になっている。上半身を起こし周りを見渡した。

亜「・・・なんで俺、こんな所に」

しかし、目を閉じた瞬間此処が何処だか分かった。
自分が居た世界とは違う気を感じたのだ。そして自分が今どんな所にいるのか、なぜ此処に居るのか理
解した。

亜「俺は、死んだんだ・・・・・此処は、死んだ後の世界。死神が居る世界・・・！」

俺はその瞬間怒りとともに、霊圧が上がっていくのが分かった。
今までの暖かい風が冷たくなったのも感じた。俺の霊圧で冷たくなった風は、空に向かって叫んだ。

亜（・・・なんだこの感じ。俺の中で何かが叫んでいる・・・？）

霊圧は、亜希が考えている内に収まった。また、暖かい風が吹く。
亜希は歩き出した――――

亜（・・・・・・・あれは、村？）

しばらく歩いていると村が見えてきた。小さい村かと思って行ってみると、思っていたより広い村だった。どうやら、此処が死んだ後の魂の行き場らしい。

亜「あのぉ、此処は、なんて言う所なんですか？」

亜希は丁度見つけた４０歳近い男に、どう言う所なのか聞いてみた。しかし、その男は奇妙な物でも見るかのように亜希を見て、言った。

男「・・・・・此処は、死んだ後の魂の行き場、流魂街って言うんだ。お前、今来たばかりか？」
亜「・・・はい」
男「そうか・・・（不気味な奴が来ちまった・・・）」
亜「・・・・・・失礼します」

亜希は一言言って歩き出した。歩いているだけで、周りから奇妙な目で見られる。さっきの男も周り

と同じ目で見ていた。

亜（やっぱり、此処でも周りは・・・あんな目で見んのかよ）

亜希は、突き刺さるかのような視線をあびながらも歩き続けた。

周りとは違う銀朱色と群青色の目。そして、凍りつくかのような冷たい霊圧。俺はいつも周りから避けられてきた。生きていた頃も死んだ後も、きっとこれからも。

亜（あの場所に戻るか・・・）

亜希は、自分が目覚めた野原に戻る事にした。

そして、野原・・・・・

亜「・・・・やっと1人になれる」

1人になれ安心したのか、眠ろうと目を閉じた。しかしその目は、再び開かれる事になった。

【グォオオォオォォーーー！】

亜「虚！？」

目を開けた瞬間目に映ったのは、こちらに向かって来る虚、そして、刀を持ち死覇装を着た・・・・

死神。

亜希の頭の中に生前の記憶が一気に流れ込んできた。

――――――霊力の暴走。

亜「ヴッ・・・アァァァァァァァーー！！」
死「！？」

霊力が急激に溢れ出し、激しい痛みに襲われた。死神はその霊力に当てられながら虚を倒した。死神
が虚を倒した時にはもう、亜希は、その場に居なかった。

亜希は走っていた。なんとか霊力を抑え、痛みに耐えながら・・・
亜「ヴァッ・・・クッ・・・（頭が・・・っ割れる・・・！）

走り続けてある湖に着いた。しかしそこで限界がきたのか、亜希はそこで倒れてしまった――――――

――――――あれから何日たっただろう。倒れてから一向に目を覚ます気配が無かった亜希。だが今日
、目を覚ました。
亜「・・・ん・・・・・・此処は、湖？」

自分の居る場所を確認して立ち上がった。
亜（俺は・・・どのくらいの間眠っていたんだ・・・・・・。あの日から・・・）

あの日、それは、記憶が一気に流れ込んできて霊力の暴走をした日。亜希は今、ある事を感じてい
た。

霊力が抑え込まれている。

亜（何か違和感が・・・・・ん？）

違和感の原因は何処からなのか、体のいたるところを見てみると、左腕の手首に紋様がある事に気が
ついた。
触ってみると、自分の霊力を感じた。

亜（どうやらこれで霊力を抑え込んでいたらしいな・・・・でも、何時の間に・・・誰が・・・・・）

後から気が付く事になるだろう。この紋様は、無意識の内に自分で付けたものだと・・・・・

亜「これからどうやって生活すればいいんだ・・・・・とりあえず、静かな所を探すか・・・・」

そう言って亜希は静かな場所を求めて流魂街中を探しまわった――――

亜「此処が・・・良いかな・・・？」

亜希が見つけた場所は、流魂街にある森の中、透き通ったアクアマリン色をした湖と、それを囲むよ
うにある緑が豊かな木々。静かな場所が好きな亜希には最適な場所だ。

亜（尸魂界って、こんな綺麗な所あるんだな・・・・）

心の中が透き通っていくような気分になった亜希。

亜（しばらくは、此処で暮らそう・・・・）

そして、運命は近づく――――――

第2話「闇と証」（後書き）

どうでしたか？

亜希にどんな運命が・・・

第3話「力への一歩」（前書き）

とりあえず見て下さい

第3話「力への一歩」

――――――――尸魂界に着てから一ヵ月半が過ぎようとしていた。霊力の暴走は、あの日から1回も起きなかった。虚も出てこなかった。もちろん・・・・死神も。

俺は一ヵ月半此処で暮らして一度も楽しいと思った事は無かった。一度もと言えば嘘になるかもしれ無い。唯一俺が楽しいと思える事が1つあった・・・見つけたんだ。

「亜希ちゃ～ん！」

亜「・・・・・舞。何処行ってたんだよ」

「ん～とねぇ・・・そこらへんの川の近くで魚見てたの！」

亜「落ちたらどうすんだよ・・・・まぁ、帰って来たから良いか」

「えへへ～！」

そう、この元気に俺に話しかけてくる小さな女の子と出合ったんだ。舞は初めて俺に会った時、俺に近づいてニコニコしていた。怖がるのではなく、俺に笑いかけてくれた。舞ぐらいの年の子供は、俺を怖がって近寄って来ないのに、舞はそんな素振りも見せず俺に笑いかけたんだ。

いつも一緒に居てくれた姉さんのように

俺は舞の笑っている顔が姉さんの笑顔と重なって見えた。その時、胸の奥で何かが波打つような感じがあった。

その日から俺と舞は一緒に暮らす事にした。舞は尸魂界に来たばかりで身寄りが無い。俺と同じだ。

今俺は、舞と2人で充実した日々を過ごしていた。

舞「亜希ちゃん、かくれんぼしよ？」
亜「かくれんぼ？」
舞「うん！亜希ちゃんが鬼で、私が隠れるの！」
亜「・・・分かった。じゃあやろうか」
舞「やった～！ちゃんと１００数えてね！」

そう言って舞は森の中に駆けて行った。亜希は目をつぶり、１００を数えだした。

亜「――――９０、１００・・・・（さて、何処に居るかな？）」

亜希は早速舞を探しに行った。
しかし、なかなか見つからない。

亜（相変わらず隠れるのうまいなぁ）

舞とは何回もかくれんぼをした事はあるが、１回も見つけた事が無かった。

亜（１回もって思うとちょっと笑えてくるな）

亜希はそんな事を思いながら微笑んだ。
しかし、次の瞬間、その顔が一変した。

『キャーーー！』

亜「！？・・・舞！！」

奥の方から悲鳴が聞こえ、亜希は急いで森の奥へ向かった。

嫌な予感がする・・・・

そして、辿り着いたのは川だった。そこに着いた瞬間目にしたのは――――

死「餓鬼が、なんて事しやがるんだ」

死「折角良い気分だったのによぉ」

血が上半身から流れ出て、顔も青白くなっている舞が”死神“の足元に倒れていた。

亜「ま・・・・い・・・・？」

血が舞の小さい体を染め上げる。その血が怖いぐらい赤く、残酷な色に見えた。

死「あ？・・・なんだその餓鬼。こいつの兄か？」

死「兄？・・・はっ、残念だったなぁ。姉さんはもうお亡くなりになりましたぁ」

死神は、いかれた声で笑った。

姉さんを殺した死神のように・・・・・

死「おい聞いてんのか、糞餓鬼」

死「おいこいつ、目の色が左右違うぞ」
死「うわっ、本当だ。気味悪りぃな」
死「どうする、こいつ？」
死「ん～・・・・妹が死んで寂しいだろうから、一緒に居させてやるか？」
死「あぁ、そうだな、その方が寂しくないだろうしな」

俺は頭の中が真っ白になっていた。死神達の声はいかれた声しか聞こえなかった。

ドクンッ

次の瞬間、死神は亜希に向かって刀を振り下ろした。しかし、亜希からは血が流れなかった。

死「な、なんだ！？」
死「何が起きたんだ！？」

死神達の刀は弾かれていた。亜希の霊力によって。

死「こいつ・・・霊力持っていたのか・・・・！」
死「なんて重い霊圧なんだ・・・！」

霊力は亜希を包み込むようにおぞましい雰囲気を漂わせていた。

亜「ま・・・・い・・・」

あれ？なんで死神がこっちを見て青ざめてるんだ？
なんでこんなに体が重いんだ？

亜希の目は闇に落ちたかのように薄黒くなっていた。
意識はあるが体が思うように動かない。
前あった、霊力の暴走とは違って、激痛は無い。
が、霊圧が重くなり、亜希からは黒いオーラが発せられていた。

死「に、逃げるぞ！」

死神達は逃げようと走り出した。しかし、いきなり体に激痛がはしり死神はその場に膝をついて崩れ
落ちた。

死「ぐぁっ・・・・ヴッ・・・・」
死「ゆ、許してくれっ・・・・・俺達が悪かった・・・・！」
亜「？悪かった？・・・悪かったですむ事かよ。お前等死神は人の大切な者をそんな簡単に奪う奴らな
のか？俺の大切な？――――」

『亜希～！』　『姉さん！？』

亜「？大切な？――――」

『亜希ちゃ～ん！』　『ま・・・・い・・・・？』

亜「？大切な。俺を・・・認めてくれた人を・・・！？？」

頭の中には、亜希に笑いかけた事と、血まみれの２人の姿が流れて来た。

――――なんだ？・・・・まるで、俺じゃない俺が話しているみたいだ。

―これは、お前の中の闇だ―

闇？

―そうだ、闇がお前の本当の気持ちに闇を上乗せして増幅させているんだ―

俺の本当の気持ち・・・・・・お前は、誰だ？

―・・・・いずれ知る時が来る。その時まで・・・・・―

おい！待てよ・・・！

―その時まで・・・・・強くなれ――――――

・・・・！――――――

亜「？死んで、償え・・・・！？」

亜希の中な闇は、落ちていた死神の刀を拾い、死神に向かって振り下ろした。

しかし・・・・

――――やめろ！――――

亜「？・・・・！・・・・・・くっ、貴様・・・・！？」

振り下ろされた刀は、死神に触れる寸前で止まった。

亜「？何をする！・・・・・貴様だってこの死神達を殺したいだろ！なのに・・・なぜ・・・・！？」

ちがう！・・・俺は、・・・俺は、こいつ等を殺したいなんて思っていない・・・！

亜「？・・・・・ふっ、甘いな。俺の存在は貴様の気持ちそのものだ！なのに、殺したいと思っていない

？ふざけるのもいい加減にしろ！？」

ふざけてるのはテメエだ・・・！

亜「？なんだと・・・！？？」

・・・確かに、俺の心には死神へのそんな思いがあった。・・・・・でも、そんなんじゃ姉さんや舞

は、笑ってくれないんだ・・・！

亜「？・・・！？？」

俺は、2人の笑っている顔が好きだ。悲しんで泣いている顔なんて、自分の胸が苦しくなるだけだ。

だから・・・

亜「？・・・何をする気だ・・・！？」

だから・・・俺の中から出て行け！これ以上、俺は2人を悲しませたくない！

亜「？ぐっ・・・・・貴様ァ！？」

テメエなんかに負けられないんだ！！

亜「？あああっ・・・・・（これまでか・・・）・・・今回は、引いてやる。だが、俺はいつでも貴様
の閉じられた心に居る！？」

スウッ

闇は、また亜希の閉じられた心の中に戻って行った。

亜「・・・・・！・・・・・戻った、のか？」

亜希は自分の手足を動かしたり、頬をつねったりしてみた。

亜「・・・戻ってる・・・！」

亜希は気づいた、死神達が怯えた目でこちらを見ている事を。

亜「・・・・・・」

亜希は無言で近づいて行った。

亜「・・・・おい」

死「ひぃっ！」

亜「そんなに怯えんなよ。さっきのは、俺であって俺じゃない。俺な中の闇だ。」

怯えている死神達に、冷静に話しかけた。

しかし、霊力を使いすぎたようだ。

亜「だら、ら・・・気に・・・す、んな・・・」

亜希はゆっくり地面に倒れた。

死「！・・・おい、大丈夫か・・・！？」

死「・・・霊力を使いすぎたんだ。・・・何処か休める所を探そう！」

死「あぁ！」

亜希は薄れる意識の中、死神達の声を聞いていた。

亜（気にすんな、か・・・・）

・・・・それでも俺はやっぱり――――

死神を許す事が出来ないだろう。

そこで亜希の意識は途切れた――――――

亜「――――ん？・・・・」

亜希は数時間後にやっと起きた。

亜「・・・・・舞」

亜希は自分の隣で横たわっている舞を見つけた。自分も何故か、木の影の所に居る事に気がついた。
たぶん、死神達が運んでくれたのだろう。

亜「助けてやれなくてゴメンな？・・・・・今まで、ありがとう」

謝罪の言葉と感謝の言葉を言った後亜希は、舞を抱き上げ湖に戻り、舞の墓を作って埋めてやった。

亜「やすらかに眠れよ？・・・・おやすみ舞」

墓の中の舞に微笑み、亜希は森を出て、流魂街がよく見渡せる丘へ行った。

亜「・・・・瀞霊廷」

亜希は此処から見える、瀞霊廷を眩しそうに見ていた。

亜「強くなれ・・・かぁ」

心の中で言われた言葉を思い出して、呟く亜希

亜（・・・・もしかしてお前に会ったら、どうしたら良いのか、答えが見つかるかもしれねぇな。その
ためには・・・・）

真央霊術院に入学して、死神になるしかない。
俺は強くなる！

答えを見つけるために、居場所を見つけるために――――

第3話「力への一歩」（後書き）

どうでしたか

続きをお楽しみに！

第４話「春　真央霊術院」（前書き）

真央霊術院入学です

私も入学したいです

第４話「春　真央霊術院」

春が来た。俺は入学試験に合格し、とうとう真央霊術院に入学した。

配属学級は第一組、”特進学級“だ。

亜（第一組特進学級かぁ）

教室に入り、自分の席に着きながら周りを見た。

男「（見ろよあれ、目の色左右違うぞ）」

男「（本当だ、なんか気味悪いなぁ）」

女「（ちょっと怖いかも）」

女「（本当にあれ人間なのかしら？）」

男「（雰囲気もなんか怖いよなぁ）」

女「（うん、近寄りがたいって言うか）」

いつもの事かと思いながら窓の外を見た。

しばらくすると先生も来て自己紹介があった。

亜「唯白亜希。西流魂街出身。・・・よろしく」

自己紹介の時は皆、自己紹介をしている人の方を見る。だから、どうしても亜希の目の色や雰囲気に

は気づいてしまう。それが嫌で亜希は、すぐに座った。

亜（特進だと色々と厄介だな・・・）

人の目もつきやすい。それだけ特進とは上と言う事だ。廊下を歩

いているだけで亜希は注目されてし
しまう。
尊敬の目とかではなく、奇妙な物を見るかのような目で。

～鬼道・練習場～

今は、鬼道の学習を受けている最中。

さすが特進の学制、皆ほとんど的に当たっている。

亜希の番が来て亜希は前に出た。

亜「・・・君臨者よ　血肉の仮面・万象・羽搏き・ヒトの名を冠す
者よ　真理と節制・罪知らぬ夢の壁
に僅かに爪を立てよ　破道の三十三、蒼火墜」

ズゴ～ン！

蒼火墜は見事に的に命中し、的は粉々になった。

女「（す、すごい・・・！）」
女「（あんなに的確に当てるなんて・・・）」
男「（でもそれが、反対に怖い）」
男「（普通の奴がやれば、普通にすごいって思うけど・・・）」
男「（あいつがやると怖いよなぁ）」
女「（やっぱり人間じゃないのかも）」
女「（えぇ～！それはありえないんじゃない・・・？）」
男「（でも、やっぱり気味悪りいな）」
男「（何事も起きなければいいけど・・・）」

そんな話し声を聞きながら鬼道の学習は終わった。
次は斬術と白打の学習だ。

～稽古場～

先「それじゃぁ、2人ずつやるから、2人1組作って～」
亜（2人、1組・・・）

2人1組と言われても亜希には仲が良い友達が居ないので、困った亜希。すると・・・

大男「おい、唯白亜希」
亜「・・・あ？」
大男「やる奴が居ねえなら俺が組んでやるよ。どうせ居ねえだろ？」

自分から組んでやるとニヤニヤしながら話しかけて来た大男は、亜希より遥かに大きい筋肉質の男だった。

亜「・・・・・じゃあ、よろしく」
大男「あぁ、よろしくなぁ」

男はさらにニヤニヤした顔になった。周りはそんな2人を見てざわついた。その内の一部は・・・

男「（はっ、引っかかりやがったあいつ）」
男「（あの大男は、特進学級の中でも戦闘力が上な奴だ。いくら鬼道がうまくても、見るからに力が弱
そうなあいつが勝てる訳ねえな）」

男「（いい気味だぜ。ボコボコにされちまえばいいのに）」

そんな話をしている内に亜希と大男の組の試合が始まった。最初は斬術だ。

先「それでは、始め！」

大男「はっ・・・（瞬殺にしてやるぜ！）」

亜「・・・・・・」

亜希が構えた瞬間、大男はその巨体の何処にそんな速さがあるのかと思うほどのスピードで亜希に斬りかかった。

大男「ハハハハァ！避けてばかりじゃ、いつになっても終わらないぜぇ！」

亜「・・・・・・・」

斬りかかる大男、それを避ける亜希。その様子を緊張の面持ちで周りの学制は見ていた。

大男（・・・・なかなかやるなぁ。だが、俺が負ける訳がねぇ。・・・・こっからだぜ、本番は！）

大男は木刀にさっきよりも力を込め、斬撃を速くした。それを今度は、受け止め始めた亜希。

大男（ふっ、さすがにもう、追いつかなくなったか・・・・・）

亜「・・・・・・・」

大男の斬撃でよろけた亜希に、大男は木刀を勢いよく振り下ろし

た。

大男「これで終わりだぁ！」

「！！？」

誰もが当たると思っていた斬撃は亜希に当たらなかった。

亜希は当たる寸前に体を横にずらしたのだ。

大男はその動きを見てびっくりしたが、すぐに斬りかかろうとした。

が、大男は床に転げ落ちた。

「・・・！？」

それは、大男が斬りかかる前に亜希が大男の背後に回り木刀で大男を気絶させたからである。

亜「・・・・・・・」

亜希は気絶している大男を見下ろした。

亜「・・・・終わりましたけど・・・？」

先「・・・・え？・・・あ～、そうか！い、良い試合だったぞ！」

いきなり話しかけられた担当の先生はびびりながら答えた。それもそのはず、今の試合を見た後に亜

希の冷めた目で見られれば誰でもびびるはず。

先「え～と・・・じゃあ次、白打・・・・・て、相手は気絶かぁ」

亜「・・・・・・・」

先「・・・・誰かやるか？」

担当の先生は、助けを求めて周りを見た。しかし、皆目をそらしてしまう。担当の先生は、顔を青く
して焦った。しかしそこで亜希が・・・

亜「・・・・はぁ・・・別に、いいですよ・・・」
先「え？」
亜「相手、先生でも・・・」
先「・・・え！？」
亜「冗談です」
先「え！？・・・じょ、冗談か・・・（よ、よかったぁ）」
亜「・・・別に白打やんなくてもいいですよ？・・・相手居ないんじゃ、しょうがないし」
先「そ、そうか・・・！・・・それじゃ、次！」

亜希は学制が座っている場所に行き座った。その時も、学制の視線は亜希にいっていた。

亜「・・・・・はぁ～・・・・」

しばらくして斬撃と白打の学習が終わった。
そして今はお昼。昼飯の時間。

亜「・・・・・外に行くか・・・」

亜希は人目のあまりつかない場所に行くために外に行った。

亜「・・・はぁ・・・1日が終わるまであと少し。なんだか、1日が長いような気がする」

昼飯を食べながら考える亜希。

亜「こんな日が毎日続くのかぁ。・・・・早く強くならないといけないのに」

昼飯を食べ終わり、その場を立ち上がり中へ入っていった。――――

そして1日が終わった。

亜「・・・・やっと終わったぁ」

亜希は背伸びをした。

そして立ち上がり、自分の部屋に向かった。

1日は、これで終わる。

第４話「春　真央霊術院」（後書き）

どうでしたか？

次回もお楽しみに！

第5話「解放」（前書き）

とうとう亜希の斬魄刀が出てきます！
どんなのかお楽しみに！

第5話「解放」

入学から六ヶ月
この六ヶ月間何も起きなかったが、今日ある事件が起こった。

～一番隊隊舎・執務室～

「総隊長、例の噂は耳にしているでしょうか？」
「うむ、耳にしておる。今年入学してきた者の事であろう」
「はっ、その事でお話が」
「申してみよ」

日当たりが良い一番隊執務室、そこでは2人の話し声が聞こえてくる。
護廷隊総隊長、山本元柳斎重国。護廷十三隊の頂点に君臨する歴戦の老将。真央霊術院を設立した総隊
長。二千年の伝統と格式を誇る死神育成機関である。
もう1人は、一番隊副隊長、雀部長次郎。口数少なく、常に総隊長の傍に控えている。

この2人が話している事、それは・・・

雀「・・・唯白亜希の事でお話させていただきます」

その頃亜希はと言うと・・・・

亜「はぁ・・・・魂葬って結構楽なんだなぁ」

魂葬の学習を受けていた。

亜「にしても、なんであんなに下手なんだ？」

亜希の視線の先には、他にも魂葬を受けている学制がいた。

男「・・・よ、よし。やるぞ？」

男「あ、あぁ」

男「せ～の！」

魂「いだっ！」

力を込めすぎて、魂魄（プラス）が痛がっている。

男「あ～！またやっちまった！」

男「お前どんだけ不器用なんだよ・・・」

男「お前だって、似たようなもんだろ！」

男「そうだけど、お前ほど力入れてねぇし」

男「・・・はぁ・・・よしっ、次こそ上手くやって見せる！」

男「それさっきも聞いたぞ」

2人が言い合っている内に魂魄は消えていった。

ちなみに魂葬とは、死んだ後も成仏せずに彷徨う魂魄を尸魂界に送る事だ。

亜「可哀相に、あの魂魄・・・・」

下手な魂葬で尸魂界に送られた魂魄に同情する亜希。

そして魂葬の学習が終わった。

移動のため中庭を通る事にした。するといきなり、集団に囲まれてしまった亜希。

亜「・・・・・・なんだ？」

周りはそれを見てざわついている。
集団の中からリーダーであろう男が出てきた。

男＊「お前が唯白亜希か」
亜「・・・・・・あぁ」
男＊「まぁ、一目見れば分かる事か。黒髪に左右違う色の目。そんな奴お前しか居ないもんなぁ」
亜「・・・・・・・・」
男＊「噂どおり気味悪い奴だなぁ」
亜「・・・・なんの用だ」
男＊「用？あぁ、そうそうお前に用があったんだ。
お前に用って言うのは他でもねぇ・・・」

男は自分の浅打をスラリと抜き、刃先を亜希に向けていった。

男＊「テメエをぶっ殺しにきたんだよ！？」

周りが男の言葉で騒然とする。しかし亜希はそれを気にする事なく言った。

亜「・・・・真央霊術院内での殺し合いは禁止されているはずだが？」
男＊「はっ、そんなの関係ねぇ！俺はただテメエを痛めつければいいんだからよォ！」
亜「・・・・・・・」

男＊「テメエは入学した時から気に入らなかったんだよぉ！特進学級の中でもトップクラスで、それが当
然のような顔して、影で悪口言われてても平然な顔だってしている！
俺より後に入って来たくせに、死神に一目置かれてムカつくんだよ！！」
亜（この人、先輩って事か）

男は拳を震わせて亜希に話した。浅打にも力が入れられて震えていた。

男＊「・・・・だから今日此処で、立ち上がれなくしてやる！！」

男は刀を構えた。亜希は仕方ないと言う顔で浅打を構えた。

～一番隊隊舎・執務室～

雀「――――以上が、唯白亜希についての情報です。」
山「うむ、よく調べてくれた。・・・・それにしても、唯白亜希に危害を加えていた死神が居たとは」
雀「技術開発局が新しい通信機の開発をして試しにいろんな所に飛ばしたところたまたま写ったようで
す。しかし、その死神の顔が写っていませんので、誰がやったのかは分かりません。」
山「よい、その死神は後々探す事にせよ」
雀「承知しました。」

すると窓から、地獄蝶が入って来た。

雀「地獄蝶？・・・・総隊長、真央霊術院からでございます」

山「して、なんと？」

地獄蝶から声が流れてきた。

〈大変です！中庭の方で学制同士での戦闘が行われています！〉

山・雀「！？」

〈戦闘しているのは2人、その内の1人は、唯白亜希です！〉

山「なんじゃと・・・！」

〈もう1人の方が意図的に刀を抜いて襲って来たようです！〉

雀「・・・どうなされますか、総隊長」

山「う～む・・・・・・そのまま見届ける事を命ずる」

雀「よろしいのですか！？」

山「・・・前申した事を覚えておるか？」

雀「・・・・はい」

山「それが今日で決まる！」

男と亜希は戦っていた。

男＊「ハアアアアア！」

亜「くっ・・・」

刀がぶつかり合い、激しい音がこだます。

亜「・・・っ・・・・破道の四、白雷」
男＊「ぐあっ・・・・！」

白雷は男の左肩に当たり、男はよろけた。しかし、男も負けてはいられない。

男＊「くそっ・・・破道の五十四、廃炎！」
亜「！・・・・・ぐっ・・・・」

亜希はなんとか直撃は避けたが、腰の辺りを少し焼けどをしてしまった。そこを抑えながら男を睨みつけた。

男＊「結構やるじゃねえかぁ？」
亜「・・・・・・・・」
男＊「なんだよ、無視すんなよぉ。・・・・ムカつくじゃねえか！」

男はまた刀を亜希に向かって振り下ろした。

亜（・・・くそっ、これじゃあ埒があかねぇ。どうしたら）
男＊「おらおら！何いらねえ事考えてやがる！そんな余裕ねえはずだぜぇ！」
亜「ちっ・・・・」
男＊「ふっ・・・・・縛道の二十一、赤煙遁！」
亜「！・・・・」

いきなり煙幕が発生し、驚く亜希。これでは、男が見えない。

亜「・・・・ちっ、何処にいやがる・・・・！」

焦る亜希。すると背中にいきなり激痛がはしった。

亜「！？・・・な、に・・・！」

なんと背後から男が破道の三十二、赤火砲を撃ってきたのだ。煙幕がおさまり、ニヤニヤしている男
の顔が出てきた。

男＊「ありゃぁ、まだ立ってんのぉ？さっきの結構きいたと思ったんだけどなぁ？」

亜「テンメェ・・・！」

男＊「あれ？・・・怒っちゃた？」

さらに笑う男。それを見て、腹が立つ亜希。

亜「縛道の六十二、百歩欄干」

男＊「何・・・！？」

突然縛道を使ってきた亜希に驚きながら避けるが、避けきれず手足に光の棒が突き刺さり地面に落下
した。

男＊「っ・・・くそっ・・・！」

亜「君臨者よ　血肉の仮面・万象・羽搏き・ヒトの名を冠す者よ
蒼火の壁に双蒼を刻む　大火の淵を
遠天にて待つ、破道の七十三、双連蒼火墜」

激しい青い爆炎が男に直撃した。

男＊「ぐあああぁっ！・・・あああぁっ・・・・！」

男は体に多くの焼けどをし、苦しんだ。
すると、いきなり男は叫び出した。

男＊「くそおぉぉーー！！」
亜「・・・・・・・・」

男の叫びに周りはざわめいた。

男＊「イテェじゃねえかぁ・・・・・頭にのんじゃねえぞ。・・・・・もう許さねえ。・・・・ぶっ殺してやる！！」

ものすごい形相で亜希を睨む男。次の瞬間、何時の間にか背後に居た男に蹴られ、亜希は地面に倒れた。

亜「・・・つぅっ・・・！」
男＊「雷鳴の長車　糸車の間隙　光もて此を六に別つ、縛道の六十一、六杖光牢！」
亜「！！しまった・・・！」

亜希は六杖光牢に捕まり、身動きがとれなくなってしまった。

男「これで終わりだ・・・！」
亜「・・・！」

男の霊圧に一瞬ゾクリとしたものを感じた亜希。確実に大きいのが来る。

男「散在する獣の骨　尖塔・紅晶・鋼鉄の車輪　動けば風　止まれば空　槍打つ音色が虚城に満ちる！
　破道の六十三、雷吼炮！」
亜「！？」

亜希は思った、これで終わりだと――――

―これで終わっていいのか？―

・・・・・誰だ？

―忘れたとは言わせない―

・・・・お前は・・・・・たしかあの時の・・・・

―そうだ―

やっと出てきた・・・・でも、もう俺は終わったんだ

―まだ終わってなどいないぞ―

・・・・なぜそう言いきれる？

―それは、俺が居るからだ―

・・・お前が？

―そう、俺が居る―

お前は一体、俺の何なんだ？

―俺は、お前の斬魄刀だ―

斬魄刀？

するといきなり目の前が光り誰かが出てきた。

〔この姿で会うのは初めてだな〕

お前が俺の斬魄刀なのか？

〔そうだ〕

亜希の目の前には、透き通るような白い肌、その肌に映えるつややかな黒髪、長髪の髪を後ろで一

本に結び、結び目に勾玉の飾りを付けている。吊り目の格好はまるで陰陽師かのような姿をしている。

・・・綺麗

〔見惚れている場合じゃないぞ〕

そうだ、俺は此処で終わる訳にはいかないんだ

〔さぁ、叫べ。俺の名を・・・！〕

あぁ・・・・お前の名は――――――

2人の影は光に包まれた。そして・・・

亜「聖羅！」

男＊「！？」

男が放った雷吼炮は光に包まれ消えていった。

男＊「！？・・・・なんだ、その斬魄刀・・・！」

男の視線の先には浅打を持った亜希ではなく、青白く光る斬魄刀を持った亜希が居た。

男＊「・・・まさか・・・・自分の斬魄刀を手に入れたのか！？」

亜「・・・・・・・」

・・・・感じる。聖羅の霊圧を・・・・。斬魄刀の中からでも分かる。鈴が鳴っているかのような心地良い霊圧。

男＊「聞いてんのかよ、おい！？」

亜「・・・・・一瞬で終わる」

男＊「・・・・！？」

男が反応した頃にはもう峰打ちで気絶させられていた。静かに倒れる男。それをただ見守る事しか出来ない周りの学制達。しかし次の瞬間・・・・

「わあああああ～～～！！」

亜「！？」

周りの学制達が亜希に向かって歓声を上げたのだった。
それに驚いて、ドン引きする亜希。

男「すげー今の・・・！」
男「本当に一瞬で終わったぞ！」
女「動きが見えなかったわぁ！」
女「すごいかっこよかった！」
男「良い戦いだったぞぉ！」
男「ハラハラする戦いだったけど、最後はワクワクしたぜ！」

思い思いの事を言いながら亜希に近寄って来る学制。いきなりの事にやっぱり引いてしまう亜希。

亜「・・・え、いや・・・・あの・・・」
男「照れんなって！今まで避けててごめんな？」
女「本当は話したかったんだけど、ちょっと怖くて話しかけれなかったの・・・！」
女「ごめんね、見た目や雰囲気で避け続けちゃって」
亜「・・・・・・」
男「今更仲良くしてって言っても駄目かもしれないけど」
男「俺等、お前と友達になりたいんだ！」
亜「！？・・・」

――――なんだ、この気持ち。・・・今までにない・・・強く心に刻み込まれるような感じ――――

男「やっぱり駄目、だよな・・・」
男「今更・・・俺等が悪いんだもんな・・・」
亜「・・・・しい・・・」
男「え？」
亜「・・・・ありがとう・・・・すごく、嬉しい・・・！」

「！！？」

全員驚いたのは、亜希からの言葉もあるが、何より、亜希の目から一筋の涙が出てきたからである。
表情はそのままながら、亜希の目には涙が浮かんでいた。

女「・・・・あっ、こ、これからよろしくね！」
女「よろしく！」
男「よろしくな！」
亜「・・・・よろしく・・・」

ひかえめながら亜希は言った。

―よかったな、亜希―

・・・あぁ、ありがとう。全部お前のおかげだ。

―いや、お礼を言う事ではない。これは亜希が私の名を呼んだからなった事だ。だからこれは、亜希
の力でなった事だ―

・・・・・・そうか、そうだよな。でもこれだけは言わせてくれ・・・・・・

これから、よろしくな！

―・・・こちらこそ、よろしく――――――

亜希は今、二つの”光“を手に入れた。

友と、聖なる力

第5話「解放」（後書き）

どうでしたか？
斬魄刀の名前とか変じゃなかったですか？
次は、ある人物が出てきます

第6話「友と優しい死神」（前書き）

浮竹が登場します

やっぱり浮竹は面白いですね～

第6話「友と優しい死神」

～真央霊術院・廊下～

男「お～い！唯白～！」
亜「・・・・ん？」
男「昼飯一緒に食わねえか～？」
亜「あ～・・・・別にいいけど」
男「よっしゃ、じゃあ急いで中庭いくぞ！」
亜「あっ、ちょっ・・・！」

ある日の真央霊術院の昼時。廊下を歩いていたら亜希に男子学制がお昼の誘いに来た。ＯＫをもらった
途端、亜希の腕を掴んで中庭に向かって走り出した。

あの日からは、いつもこんな感じだ。あの日、それは、俺が二つの光を手に入れた忘れられない日。
あの戦いから三ヶ月。完全にではないが、少しずつクラスに、真央霊術院に馴染み始めてきていた。

女「あ、亜希君！こっちこっち！」
女「一緒に食べよ～！」
男「何言ってんだよ、俺が先に誘ったんだから唯白は、俺と一緒に食べるんだ！」
女「何よ、先に誘ったとか関係ないでしょ？暑苦しい男と食べるより女の子と食べる方が良いに決まってるじゃない」
女「そうよそうよ！」
男「暑苦しいって何だよ！俺の何処が暑苦しいって言うんだよ！」

女「全部よ！」
男「なんだと～！唯白、こんなウザイ女ほっといて俺と一緒に違う場所で食おうぜ！」
亜「え？」
女「ちょっと、ウザイってなによ！暑苦しい男にだけには言われたくなかったわ！」
男「ウザイって認めるんだな」
女「認める訳ないでしょ！」
男「あ～、うるせ～うるせ～！」
女「このドブ男！」
男「うるせーよ、ブス女！」

三人の言い争いはエスカレートしていく一方。

亜「・・・・はぁ・・・・1人で食いてぇ・・・・」
男「ん？何か言ったか？」
亜「何でも・・・・て言うか、４人で食えばいいだろ」
男「え、マジかよ・・・・」
女「亜希君が言うならそれでも良いよ！」
女「どっちにしろ、亜希君と一緒に食べれるしね！」
男「しょうがねえなぁ・・・・」

こうして何とか昼飯を食べ始めた亜希達。
食べている間でも三人の言い争いは止まることは無かった。

数分後、お昼休みもあと少しで終わる前。
亜希は何人かの男子学制と廊下を歩いていた。

男「ったく、あの女共！俺達の邪魔しやがって！」
亜（俺達？・・・・）

男「そう言えば近々、今年入学した学制の中から、死神になる奴が居るらしいぜ？」
男「へ～、そりゃスゲエな～。って、もしかして唯白じゃね？」
亜「なんで俺なんだよ」
男「だってさ～、特進学級の中でも上位に入ってるしよ～」
亜「上位の奴なんていくらでもいるだろ」
男「でも俺は唯白だと思うぜぇ」
男「俺も俺も！」
亜「・・・そうかよ・・・（死神かぁ・・・）」

すると前方から亜希よりは遥かに大きい長身の男が話しかけてきた。

「君が、唯白亜希君かい？」
亜「・・・・はい、そうですけど・・・」
「そうかぁ、やっと見つけたよ～。ちょっと話があるんだけどいいかな？」
亜「はぁ、ちょっとなら」

話し終わったところで、隣に居た男子学制が小声で話してきた。

男「（おい唯白、お前あの方と知り合いか！？）」
亜「知らねえ人だよ。しかも俺に名前聞いてきただろ」
男「（お前、あの方を知らねえのか！？）」
亜「？・・・なんだよ」
男「（あの方はなぁ、護廷十三隊・十三番隊隊長だぞ！？）」
亜「！！・・・・護廷十三隊・十三番隊隊長・・・？」

亜希は驚き、身長の男を見た。

亜（あれが隊長・・・・て事は、あの羽織が、隊首羽織）

護廷十三隊・十三番隊隊長、浮竹十四郎。温厚篤実な性格で護廷隊きっての人格者である。病のため
雨乾堂に臥せている事が多い。

とりあえず亜希は、浮竹について行き1つに部屋に入った。

浮「まっ、とりあえず座ろうか！」
亜「・・・はい」

2人はとりあえず座った。

亜「で、用件は何ですか？」
浮「あっ、そうだ！自己紹介まだだったね！」
亜（話し聞けよ・・・）
浮「俺は護廷十三隊・十三番隊隊長の浮竹十四郎だ。よろしく！」
亜「・・・よろしくお願いします。・・・・それで俺に用件ってなん・・・」
浮「そうだ！お菓子あるんだ！」

そう言うと浮竹はお菓子をドッサリ出してきた。
2回もアッサリ話しを違う方向に持っていかれ、ついに亜希は・・・

亜「聞いてますか、浮竹隊長！」
浮「うん、聞いてるよ？」
亜「と言いながらお菓子を出さないでください」

呆れる亜希、お菓子を差し出す浮竹。

亜「本当に冗談はここまでにしてください」
浮「？冗談じゃないんだけどなぁ。・・・・まぁ、本題に入ろうか」
亜（やっと本題か・・・）
浮「単刀直入に言うよ？・・・亜希君、君は今年で死神になることに決まったんだ」
亜「え？・・・・死神・・・？」
浮「あぁ、元柳斎先生が決定なさったそうだ」
亜「総隊長が？」
浮「あぁ」

いきなりの事に驚く亜希。亜希の心は大きく揺れる。

亜「で、でも俺はまだ一年もたっていませんし・・・」
浮「その点は問題無い。亜希君は始解まで出来ているそうだね？」
亜「！・・・・はい」
浮「そこが出来ていれば問題は無いそうだよ」
亜「・・・・ですが・・・」
浮「ん？」
亜「俺はまだ・・・死神とは・・・」
浮「・・・・・事情は聞いているよ」
亜「！・・・・俺の事調べたんですか・・・？」
浮「俺は元柳斎先生から聞いた事しか知らない」
亜「・・・そう、ですか・・・」
浮「・・・・明日の朝には此処から出るけど大丈夫かい？」
亜「・・・・明日、ですか」
浮「急すぎる事は、分かっているんだけど、上の命令だからね」

亜希は、しばらく考えた。そして意を決して言った。

亜「分かりました。朝まで準備を済ませておきます」
浮「よかった・・・それじゃ俺はもう行くけど・・・」
亜「？」
浮「護廷には優しい人がたくさん居るから心配はいらないよ？もちろん、俺も居るからね？だから、安心して護廷に来ても良いよ」

浮竹は微笑み、この場を後にした。
浮竹の優しさに触れた亜希は、少し楽な気持ちになった。

亜「・・・・・ありがとうございます」

浮竹が出て行った後の扉に向かって礼をし、お礼の言葉を言った亜希

亜「・・・・明日、かぁ・・・・」

亜希は考えた。明日には死神になる事・・・なってしまう事。
死神になったら、上手くやっていけるのだろうか。そんな不安が湧き上がってくる。

亜「考えるのはやめだ・・・・・もう寝よ・・・・」

考えるのをやめ、明日のために亜希は寝室で寝た。

明日は友との別れ、そして――――――

第6話「友と優しい死神」（後書き）

この話しでは少しギャグ？っぽいのを入れてみました

次の話しは大人気の人物が出てきます

第7話「俺じゃ悪いのかよ」（前書き）

大人気の人物とは誰でしょう？
大人気と言ったらあの人しか居ないでしょ～！
それではお楽しみに～

第7話「俺じゃ悪いのかよ」

暖かいような冷たいような風が吹く、スッキリしない朝。
亜希は誰も居ない真央霊術院の門の前に居た。

亜「もうこの門も見ることも無いのかぁ」

真央霊術院の皆にはもう会えない。やっと慣れてきたこの生活。
俺は誰にも”さようなら”とも言えず、
此処から去っていくのか・・・・

「貴方様が唯白亜希様ですね？」

亜「？・・・・はい」

どうやら迎えが来たようだ。

「私は一番隊直属の至急伝令などを行う特殊部隊の者です」

亜「迎え、ですよね・・・？」

「はい、それでは早速瀞霊廷へ向かいましょう」

亜「・・・・分かりました・・・」

そして亜希は特殊部隊の者について行った。真央霊術院に一礼して。

しばらく走っていると、バリアフリーの建物が見えてきた。瀞霊廷だ・・・

「着きました。それでは中へ」

亜「・・・はい」

瀞霊廷の中に入ると、すぐに一番隊の隊舎に向かった。
そして一番隊隊舎の中。

今は執務室に向かっている。

「此処が一番隊の執務室です。それでは、私はこれで」

亜「ありがとうございました・・・」

特殊部隊の者が去り一人になった亜希。

コンコン

亜「・・・・失礼します」

亜希は中へ入って行った。

亜「唯白亜希です」

山「うむ、よく来てくれた。話しは十四郎から聞いておろう」

亜「はい、これからよろしくお願い致します」

山「まぁ、そう硬くなるでない」

亜「ですが総隊長ですので・・・」

山「よいよい、少し肩の力をぬいてもよいぞ?」

亜「・・・分かりました。１つ聞きたいのですが、俺の入る隊は何番隊でしょうか」
山「十番隊じゃ」
亜「十番隊・・・」
山「うむ、十番隊の隊員は皆優秀でのう、特にそこの隊長は、史上最年少で隊長になっておる。彼も、
流魂街育ちじゃからすぐに馴染めるじゃろう」
亜「分かりました。それでは十番隊での職務を心して取り掛かります」
山「早速十番隊にあいさつに行ってまいれ」
亜「はい、それでは失礼します」

そう言って亜希は執務室から出て、執務室の外で待っていた、案内人の死神と十番隊に向かった。

雀「十番隊でよろしかったのですか？」
山「十番隊が適任じゃろう」

いつの間にか居た雀部が元柳斎に聞いた。

雀「上手くやって行けるでしょうか？」
山「心配はいらないじゃろう。十番隊だけではない、周りにはいろんな奴が居るから大丈夫じゃ」
雀「・・・・そうですな」

その頃、亜希はと言うと、十番隊の執務室の前に居た。

亜「・・・・・・・・」

亜希は息を整えてから中へ入って行った。

コンコン
亜「失礼します」
「おう、入れ」
入ってすぐに目に入ったのは小さい少年だった。
「お前が、唯白亜希か？」
亜「は、はい。唯白亜希です。あの・・・隊長は・・・」
「俺だ」
亜「・・・・・え！？」
「・・・俺じゃ悪いのかよ・・・」
亜「いえ、そう言う事じゃなくてですねぇ・・・（小さい・・・）」
「言いたい事が顔に出てるぞ」
亜「あっ、すみません！」
「・・・俺は、十番隊隊長・日番谷冬獅郎だ」
亜「よろしくお願いします！」
すると、背後からいきなり・・・
「あら？ずいぶん可愛い子入って来ましたねぇ、隊長」
亜「！！」
背後からいきなり抱きしめられたのである。ちなみに抱きしめたのは、十番隊副隊長・松本乱菊だ。
彼女は、大人の色香漂う護廷十三隊随一の妖艶美女である。が、酒好きでよく執務室をか酒瓶だらけにする事が多い。

日「おい、・・・松本・・・」
松「？何ですか？」
日「そいつ、タップしてんぞ」
松「あら？」

よく見ると亜希の顔は乱菊の神々の谷間に沈んでいた。ずっと抱きしめられていたので、とても苦し
そうだ。

亜「ゲホッ、ゲホッ・・・・はぁ・・はぁ・・・・っこ、殺す気か！？」
松「ごめんね～！気が付かなくて・・・」
亜「はぁ、はぁ・・・（あっ、やばい、ため口・・・）」

つい勢いでため口で言ってしまった亜希。

亜「す、すみません・・・ため口で言ってしまって・・・」
松「いいのよ～？今のは私が悪いんだし」
日「確かにお前が悪いな」
松「む・・・私、隊長には言ってないんですけど～？」
日「それでもお前が悪いのは変わらないだろ」
松「隊長～！」
日「うるせぇ」

2人のやり取りを見ている亜希。ボーと2人の様子を見ていると、それに気が付いた日番谷が話しか
けてきた。

日「・・・すまねぇ、話しがずれちまった。これからは十番隊で任

務をこなしてもらう。分からない事
があったら何でも聞いてくれ」
亜「分かりました。それではこれで失礼します」
日「あぁ」

亜希は静かに扉を閉じ執務室を出て行った。
亜希が出て行った後の執務室では・・・

松「隊長・・・あの子・・・」
日「あぁ、・・・・俺達を映しているようで映していない。あいつは、心を閉ざしている。そう言う目
をしている」

日番谷は目を細め、今十番隊の廊下を歩いているであろう亜希を思い返した。

日「これから、大変な日が続きそうだな」
松「・・・はい」
日「俺達はできる事をやるしかねえな・・・」
松「そうですね。・・・何事も起きなければいいですね」
日「・・・あぁ」

その頃、亜希は・・・

亜「楽しそうな隊だったなぁ・・・・（でも・・・・）」

それが表面だけだったら・・・・裏ではどんな事を言っているか想像は付く。
死神は信用できない。笑っていたとしても本心が、俺を拒絶していたとしたら。いつか裏切られる。

もし、此処で俺がまた大切な人をつくったとしても、それはいつか、儚く砕かれるだろう。
それならば、つくらなければいい。死神を信用しなければいい。
亜希は死神を信用できない。それだけ、死神が亜希に与えた衝撃は大きいのだ。

亜希は今日一日中その事で頭がいっぱいだった。
そのせいか、1日が過ぎるのを早く感じた亜希。

亜「1日が、終わる・・・」

ベットの上でぼんやりと考え込む亜希。

亜「明日は、なんだか・・・いやな雲行きになりそうだ・・・」

空は不気味な色をしていた。亜希はその不気味な空を見ながら眠りについた。

第7話「俺じゃ悪いのかよ」（後書き）

最後はシリアス？ぽくなってしまいました
日番谷が出てきましたね～！

私は、日番谷が大好きです！

次は少し？長いです

第8話「失う瞬間」（前書き）

たぶん長くなると思います
戦闘の場面があります
がんばって読んで楽しんでください

第8話「失う瞬間」

怪しい雲行きの今日、朝。
亜希は重いまぶたを開け、体を起こした。

亜「・・・・もう朝か・・・・」

死覇装に着替え、斬魄刀を腰にさげ部屋を出た。

亜「ん？・・・・地獄蝶？」

地獄蝶が亜希の前で止まった。

亜「？・・・・」

「唯白、至急、執務室まで来い」

亜「！・・・・日番谷隊長」

「用件はその時言う」

亜「・・・・分かりました」

急いで執務室に向かう亜希。

そして、執務室前。

コンコン

亜「唯白です。入ります」

「あぁ、入れ」

入った瞬間目にしたのは・・・・

亜「な・・・何ですか、これ・・・・？」

目にしたのは、日番谷の机の上にある書類の山、ハンパではない。
亜希がびっくりしたのはそれだけ
ではない。と言うかほとんどの原因が、これだ・・・・

松「ん～・・・隊長～、頭が痛いですぅ～」
日「知らん。テメエが飲みすぎたせいだろ」
松「隊長～！」
日「うるせぇ」

乱菊が顔を真っ赤にして床に寝っ転がっている。そして、その周りには、酒・酒・酒・酒。何本もの
空の酒瓶が転がっている。

亜「ヴッ・・・・すごい臭い・・・・」

酒の臭いも充満している。結構きつい臭いだ。

亜「ひ、日番谷隊長・・・これは一体・・・・」
日「すまねぇ、気にすんな。いつも事だ」
亜「いつもって・・・・」

いつもと思うと、少し引いてしまう亜希。

日「それじゃ、本題に入るぞ」
亜（副隊長の事、ほっといていいのか・・・？）
日「本題って言うのは・・・・唯白、今日任務に行ってもらう」
亜「・・・え？」
日「任務って言っても簡単な任務だそうだ」
亜「任務、ですか・・・」
日「あぁ、心配すんな、他にも十番隊の隊員が一緒だ。それに、お前の力を試す任務でもある」
亜「力を、試す・・・」
日「・・・簡単な虚退治だ。すぐに終わると思うが、油断すんなよ」
亜「！・・・はい！」
日「場所は、一緒に行く奴等から聞け」
亜「分かりました。それでは失礼します」

亜希は執務室から出て歩き出した。

亜「・・・・・・」

死神なんて信用できない。何か裏があるかもしれないから。
俺の大切な人を奪っていくから。

でも、さっき・・・・

『油断すんなよ』

当たり前な事を言っているだけだ。でも、その時の日番谷隊長の真剣な顔を見た時、心がびっくりするほど、高鳴った。

なぜ死神にそんな事言われただけで心が高鳴る？

死神に言われただけで・・・・

亜「・・・・疲れているんだな・・・・こんな事を考えるなんて・・・」

片手で顔を抑えると、いつの間にかに集合場所に着いていたようだ。

そこには何人かの隊員がいた。あいさつをしようと近づいて行った途端、亜希は目を見開いた。

それは・・・・

亜「あ、あいつ・・・あの時の・・・」

『あぁ、その方が寂しくないだろうしな』

『ゆ、許してくれっ、・・・・俺達が悪かった・・・・！』

そう、舞を殺した死神が居たのだ。

するとその死神が亜希に気づいたようだ。

死「ひぃ！お、お前・・・あの時の・・・・！」

亜「・・・・・・・」

その死神は驚いて悲鳴を上げて、尻餅をついた。

死「な、何でお前が此処に・・・・」

死「なんで、怯えてんだよ？」

怯えている死神を気にして、他の死神が話しかけてきた。

死「あ・・・・いや、その・・・・」

亜「・・・・・・唯白亜希です」
死「え？」
亜「この間、入って来たばかりの唯白亜希です。今日はよろしくお願いします」
死「お前が唯白か・・・こちらこそ、よろしくな」
亜「・・・はい」

全員集合したようなので、亜希達は出発した。

瞬歩で目的地まで一気に行った。数分走っていると目的地に着いた。

死「着いたぞ。もうすぐ虚が現れるから油断すんなよ」

しばらくすると、数十体の下級虚が現れた。

死「行くぞ！」
亜「はい！」

虚との戦闘から数十分。亜希達の周りには、虚の血が飛び散っていた。それ以外には何も無い。

どうやら戦闘は終わったようだ。

死「ふぅ・・・・テメエ等！誰も死んでねえな！」

「おう！」

死「軽傷の者が数名いる。軽い手当てをしてから、瀞霊廷み戻ろう」
死「分かった。手当てしたらすぐに戻るぞ」
死「あぁ」

そして数分の休憩がとられた。

死「おい、お前はケガしてねえか？」
亜「いえ、俺はただのかすり傷ですから、自分で治せます。ありがとうございます」
死「そうか、それならいいんだが。それにしても、入隊したばかりなのに、なかなかやるじゃねえか」
亜「そんな事ありませんよ。さっきは何回も何回も助けてもらってますし、俺なんてまだまだですよ」
死「それでも新人にしては上出来だったぜ？十番隊はまた優秀な奴が増えたな！」
亜「大げさですよ」
死「褒めてるんだから、ありがたく喜んでおけって！」
亜「・・・元気な人ですね」

2人で話していると突然・・・・

【グオオォォォォォーー！】

「ぎゃああー！」

亜「！！？」
死「な、何だ！？」

突然虚の声が聞こえたと思いきや、他の死神の叫び声が聞こえた。
2人は急いで声のした方へ向かった。

そこで目にしたのは・・・・

死「ぐあああああー！」
死「く、来るなぁ！・・・うっ、ヴアアアー！」

死神達を虚が切り裂く光景。
なぜこんなに接近している虚に気が付かなかったのだろうか。

亜希は斬魄刀に手をかけ抜いた。すぐに助けに行こうとした。
しかし、それはさっきまで話していた死神によって止められた。

死「待て」
亜「な、なぜですか！？早く助けに行かないと・・・！！」
死「あの虚はさっきまでの下級虚とは違う。そんな勢いで行ったら、すぐにやられるぞ」
亜「・・・・すみません」
死「気配を消せるって言うのは厄介だな」
亜「厄介ですね」
死「常に周りに気を配らないとやられるから、気をつけろよ」
亜「はい！」
死「行くぞ！」

2人は虚に向かって走り出した。

死「唯白！始解しろ！」
亜「はい！」

そう言われると亜希は走りながら始解をした。

亜「導く葵、聖羅！」

亜希の斬魄刀は青く光り、柄の先には勾玉がついている。

亜（いつ見てもシンプルすぎる斬魄刀だな）

そして亜希は虚に斬りかかった。しかしさっき倒した虚とは違って、やはり倒すのには時間がかかり

そうだ。

亜「ちっ・・・・きりがねぇ・・・」

亜希の斬魄刀、聖羅は始解すると羽が生えたかのように斬魄刀が軽くなり斬撃のスピードが上がる。

軽い衝撃波を出す事できる。勾玉は自在に大きさを変えて、ブーメランのようにして使える。

苦戦しているといきなり上から虚が襲いかかろうとしていた。

亜「・・・殺羅、相殺」

亜希は冷静に技の名を言い聖羅を虚に向け振り下ろした。

すると、虚は両腕を斬り落とされ仮面が粉々になった。

殺羅相殺（せつらそうさい）。無数の鋭い刃を聖羅を振り下ろすと同時に敵に攻撃する技。

亜「ふぅ・・・・危なかった・・・」

「ヴアアァアァー！」

亜「！・・・この声は・・・！」

亜希が振り向いて見たのは、自分と話していた死神が虚の大きな爪で貫かれて光景だった。

亜「！！？」

ゾクリと言うものを感じ動けなかった亜希。しかし、次の瞬間・・・

【グオオォオォオーー！】

亜「！！？・・・しまった・・・！」

振り向いた時にはもう遅く血が飛び散っていた。

亜「うっ・・・・あれ？痛くない・・・？」

確かに血は飛び散っていた。しかし痛くない・・・

疑問に思っていた亜希は足元に何かが転がっている事に気が付いた。

亜「！・・・テメエは・・・！」

転がっていたのは、舞を殺した死神だった。

死「ヴッ・・・っ・・・ケガ、ねえか・・・？」
亜「なんで・・・・・！」

亜希はその死神の傍に寄った。しかし、虚がこちらに向かってきている。

亜「・・・縛道の六十一、六杖光牢」

六杖光牢が虚を捕らえた。
そして亜希は死神に静かに言った。

亜「・・・なんで俺を庇ったんだ？」
死「俺は・・・お前の、大切、な・・・妹を、殺した。・・・・俺は、それを・・・つぐわないと、いけ・・ない・・・！」
亜「・・・その事はもういいて言っただろ」
死「あの時の、俺は・・・どうかしていた。お前に・・・・死んで償えって・・・言われた、のが・・・今まで、ずっと頭から、離れ、なかった・・・！お前が来る前・・・もっ、死のうと、思って いたんだ・・・・。でも、俺は、あの日以来死が怖く・・・・なった」
亜「！・・・俺のせいで・・・」
死「お前のせいじゃ・・・っ・・・ない・・・！悪いのは、俺だ！俺があの時、妹をころさなければ」
亜「違う！俺のせいなんだ！」
死「・・・っ・・・」
亜「俺が・・・俺があの時、舞を早く見つけていれば・・・！あの時、俺に力があれば・・・舞は死な

なかったかもしれない！」
死「・・・・・・・」
亜「・・・俺はいつもそうだ。いつも大切な人を守れないで、失っていくのをただただ見ているだけだ
った。大切な人を見つけれずにどうやってまもるんだよ！姉さんだって・・・・・」
死「姉、さん・・・？」
亜「俺には姉が居た。学校でも外でも周りに避けられていた俺に笑って接してくれたんだ。俺はいつも
笑っている姉さんが大好きだった。俺と姉さんには霊力があった。ある日を境に俺は闇に落ちた・
・・」
死「ある日・・・？」
亜「俺と姉さんが・・・・・死神に殺された日に・・・」
死「！？」
亜「目の前で死神が姉さんを斬りつけたんだ。その時、俺は何もできず、ただ姉さんが血まみれで倒れ
ていくのを見ている事しかできなかった。恐怖で体が動かなくて逃げる事が出来なかった。姉さん
の傍に、駆け寄る事も・・・！」
死「・・・・・・・」
亜「なんで俺がこんな目に合わないといけないんだって何回も思った。でも結局、全部自分のせいなん
だ！もう、目の前で誰も失いたくないんだ！だからお前にも生きててほしい・・・！」
死「！・・・・・ありがとう。初めてだ、こんなに一生懸命生きてほしいなんて言われたの。・・・・
でも・・・グブッ！」
亜「！？」

死神は大量の血を吐いた。

死「お、れは・・・やっぱり罪を償わないといけない。それに・・・っ・・・俺はもう駄目だ・・・」

亜「そんな事はない！今すぐ治療すれば・・・！」

亜希は治療しようと手に霊力を込めて、死神の傷口にてを添えようとした。しかしそれは、死神の手
で止められた。

死「いい・・・俺は此処で、死ぬ。・・・・虚もこっちに向かってきている」

後ろからは、いつの間にか六杖光牢を解いた虚と、その他の虚がこっちに向かってきていた。

死「・・・げほっ、げほっ・・・・お前に会えて、良かった。・・・お前、は・・・生き延びて、くれ
・・・！」

亜「や、やめろ・・・そんな事言うな・・・！」

死「本、当に・・・すま、なかった・・・っ・・・・そして、ありがとう・・・・・――――」

亜「！！・・・おい、なんで目閉じるんだ・・・・目開けろよ・・・！」

揺すっても起きない死神。

亜「・・・・どう、して・・・」

虚が亜希目掛けて爪を振り下ろした。しかし次の瞬間、亜希から

ドス黒い霊圧が出て、亜希を包み込
んだ。それは、舞を殺された時より強大なものだった。

亜「・・・やだ・・・いやだ・・・！また、俺は！」

霊圧はだんだん大きくなっていった。
虚達はそのドス黒い霊圧で亜希に近づけない。
草や木、花は枯れた。

亜希の頭の中には、亜希が今まで見てきた、血の映像が流れていた。その映像が流れるたびに、霊圧
は、さらに上がっていく。

そしてついにそれは、開放された。

亜「あああああああーー！！」

ドス黒い強大な霊圧は開放され、虚を一瞬にして消し飛ばした。
そして、その霊圧は、亜希の周りの
数メートル先ぐらいまで消し飛ばし、ドス黒い霊圧のなごりを残して収まった。

日「なんで今になって報告が来るんだよ。もっと早く報告しろよな」
松「そうですね。まさかあの虚の中にあんな虚がいたなんて」
日「早く行かねぇと、唯白達が危ねぇ」

日番谷、松本の率いる十番隊は今、亜希達の居る場所へ向かっていた。それは、亜希達が相手している虚がただの下級虚ではないと報告があったからだ。

そして、目的地に着いた日番谷達。しかしそこで目にした光景は・・・・

日「な、なんだ・・・これは！」
松「隊長・・・これは・・・！」

静かな森の中。しかしそこには死神達の無残な死体。大きな円をかたどったかのような深く削れた大地。そして、その中心に居る亜希。

日「ゆ、唯白・・・？」

日番谷は一歩ずつ亜希に近づいて行った。すると亜希が振り向いた。

亜「・・・ひ、つ・・・が、や・・・隊・・・長・・・・――――」
日「！？」

言い終わると同時に亜希は倒れた。それを日番谷は、上手く支えた。

日「おい、しっかりしろ！おい！・・・・・まだ息がある。松本！唯白がまだ生きている、早く四番隊の
奴を・・・！」
松「はい！」

日番谷は亜希を背負い四番隊の居るテントに向かった。
その後も、辺りは落ち着かなかった。
亜希の異変にも気づかずに――――――

第8話「失う瞬間」（後書き）

長くてすみません
でも、見てくれてありがとうございました。

第9話「松本〜！！」（前書き）

この話しは、酒がたくさん出てきます

亜希は名前だけしかでてきません

ほとんどがギャグなので楽しんでください！

第9話「松本～！！」

松「あー・・・もう駄目。疲れた～！」

十番隊の廊下を乱菊は1人で歩いていた。
彼女が疲れている理由、それは・・・・・

松「昨日の報告書とか、書類とか・・・徹夜ででかすなんて、隊長・・・・鬼だわ～～！」

亜希が瀞霊廷に運ばれた後の報告書を書き、乱菊が溜めに溜めた書類を処理する。乱菊と日番谷は徹
夜でそれをでかした。

松「あんなの隊長だけでやればいいのに・・・・私は隊長みたいに手際よくないんだから、あんなの徹
夜でやったら死んじゃうわよ・・・・」

歩きながら愚痴を言う乱菊。何かでスッキリしたいと考えていると・・・・

「あっ、乱菊さん。こんな所で何してるんですか？」

松「あんた・・・修兵・・・」

乱菊に話しかけてきたのは、護廷十三隊・九番隊副隊長、檜佐木修兵だ。檜佐木は、左頬に69の刺青
を彫っており、ノースリーブの死覇装を着ている。死神達に人気「瀞霊廷通信」の編集をしている。

松「修兵、あんたこそ十番隊で何やってんのよ」
檜「俺は、瀞霊廷通信を渡しに来たんです」
松「あぁ、なるほど・・・じゃあ私が隊長に渡しとくわ」
檜「ありがとうございます」

瀞霊廷通信をふところにしまう乱菊。
すると何を思いついたのか、笑顔で檜佐木に言った。

松「ねえねえ修兵！今から十番隊の執務室で飲まない？」
檜「え！？・・・・い、いいんですか？こんな朝っぱらから」
松「大丈夫よ～！今隊長居ないし！」
檜「いや、そう言う問題じゃ・・・・」
松「そうだ、吉良も呼びましょうよ！あと、京楽隊長も！」
檜「あの乱菊さん、俺の話し・・・・」
松「私お酒の準備してくるから、あんたは吉良と京楽隊長呼んできてちょうだい！」
檜「ら、乱菊さん・・・・」
松「いいわね、修兵！」
檜「・・・はい・・・・」

話しを聞いてくれない乱菊に呆れたのか諦めたのか、檜佐木は弱弱しく返事をした。そして乱菊は手
を振って走り去って行った。檜佐木はため息をついて歩き出した。

その頃、乱菊はと言うと、十番隊の執務室に早くも着いていた。

松「さーて、今日は盛り上がるわよ～！」

鼻歌を歌いながら酒を用意する乱菊。

そして数分後。

コンコン

檜「乱菊さーん、檜佐木です。入りますよ？」

松「いいわよ～！」

扉は静かに開けられ、３人の男が入って来た。

松「ちゃんと連れて来たわね！」

檜「連れて来ないと怒るでしょ乱菊さん・・・」

松「当たり前じゃな～い！」

檜佐木の後ろに居る男２人が、乱菊に話しかけてきた。

「乱菊さん、本当にいいんですか？こんな朝っぱらから」

松「修兵と同じ事言わないでよ～。今日はパーティーなんだから！」

檜「いや、パーティーじゃありませんよ」

「いいんじゃない？乱菊ちゃんがしたいって言うならぁ？」

松「そうですよね～！」

檜佐木と一緒に来た男２人は、吉良イヅルと京楽春水だ。

護廷十三隊・三番隊副隊長、吉良イヅル。少々暗い感じの吉良。

檜佐木は真央霊術院時代の先輩である。真央霊術院では首席合格している。

護廷十三隊・八番隊隊長、京楽春水。隊長羽織の上に女物の着物を羽織り、女物の長い帯を袴の帯として使うなど派手な格好をしており飄々とした性格。酒と女好き。

浮竹十四郎と共に真央霊術院を出た初めての隊長になった。

松「それじゃあ、早く飲みましょうよ～！」
京「じゃあ飲もうか～」
檜「・・・・・・・・」
吉「・・・・・・・・」

早速飲み始めた乱菊と京楽。
檜佐木と吉良は呆れていた。

京「いや～、乱菊ちゃんからお誘いがくるとは思わなかったよぉ」
檜「俺は強制的ですけどね」
吉「と言いながら飲んでいるじゃないですか」
檜「お前だって飲んでるだろ」
吉「僕はいいんです。嫌じゃありませんし」
檜「ムカつく奴だなぁ」
京「こらこら2人とも、喧嘩しないで。飲もうよぉ」
吉「分かりました。檜佐木さんの事はほっといて飲みましょう」
檜「吉良テメエ、いい加減にしろよ・・・」
京「まあまあ、落ち着いて」

檜佐木は吉良の態度にきれかけたが、京楽が止めたので、檜佐木は飲み始めた。

松「三人共飲んでますか～？」
京「うん、飲んでるよぉ」
檜「乱菊さん、もう3本飲んだんですか？あまり早く飲むと体に悪いですよ？」
松「いいのよ～。ほら、修兵ももっと飲みなさいよ～！」
檜「あ、ちょっ・・・！」

乱菊は檜佐木の口目掛けて酒瓶を突っ込んだ。いきなりの事に檜佐木は抵抗ができず、一本丸ごと酒
を飲んでしまった。

檜「げほっ、げほっ・・・ら、乱菊さん・・・」
松「だらしないわね～。男なら一気飲みくらい出来ないでどうするのよ～！」

吉「乱菊さん、酔ってますね」
京「うん、良い飲みっぷりだねぇ」
吉「京楽隊長も結構飲んでますよね」
京「僕は飲んでもあんまり酔わないから」
吉「いいですね。あまり酔わない体質で」

2人で話していると、いきなり・・・・

檜「乱菊さ～ん！もっと俺にも酒くださ～い！」
松「いいわよ～！やっと調子出てきたわね～！」
檜「俺は最初から調子いいですよ～！」
松「よ～し、吉良！あんたも飲みなさい！」
吉「え？ら、乱菊さん・・・！？ちょっ！」

檜佐木同様口に流し込まれた吉良。京楽はそれを楽しそうに見ていた。

そして、数時間後・・・・

吉「なんだよあの狐～！裏切られたって寂しくなんかないぞ～！」
松「そうよそうよ！あんな狐目野郎～！」
吉「帰ってきたって、許してやんないぞ～！」
松「私も許してやるもんか～！もし帰ってきたら、あの目無理やりこじ開けてやる～！」
吉「僕もこじ開けてやる～！」

乱菊と吉良は肩を組んである人物の愚痴を言っていた。その人物は、尸魂界には居ない。
踊るように揺れる二人。

檜「う～・・・の、飲みすぎた～・・・み、水～・・・」
京「大丈夫～？はい水」
檜「あ、ありがとうございます」
京「それにしても、あの2人元気だねぇ」
檜「あの2人、いつもの事じゃないですか～」
京「そうだね～」

そして、パーティ（飲み会）は全員が酔いつぶれるまで続けられた。

日「な、なんだこれは・・・！」

執務室の扉を開けた日番谷が見たのは、乱菊、京楽、檜佐木、吉良が床に寝ている光景。

日「・・・・・・・」

日番谷は乱菊を見て一言・・・

日「松本～！！」

第9話「松本〜！！」（後書き）

どうでしたか？

乱菊、京楽、檜佐木、吉良の飲み会の様子は？

やっぱり〆は日番谷の怒声が一番！

第１０話「１人の孤独」（前書き）

前半は、藍染と市丸が出てきます
２人がこんな事を話している訳ありませんが、書いてみました。

第１０話「１人の孤独」

砂が吹き荒れる広い砂漠。緑も無く、ただ砂だけがある世界。しかしそこには、１つの城があった。

～虚圏・虚圏城～

「藍染はん、ホンマにこの子、仲間にしはるつもりですか？」
「あぁ、あの子の力は使えそうだからね」
「まぁ、藍染はんが良いって言わはるんでしたら、口出ししませんけど」

２人の男が１つの映像を見ている。そこには、１人の少年が映っていた。

唯白亜希

映像を見ている二人、藍染惣右介、市丸ギン。
護廷十三隊の五番隊と三番隊の隊長だった２人。
黒崎一護率いる旅禍が瀞霊廷に侵入して数日後、藍染達は尸魂界を裏切った。
そして此処、虚圏に居る。

市「藍染はん・・・」
藍「なんだい・・・？」
市「あの子ぉ・・・・・・カワエエですなぁ」
藍「・・・・・・・」
市「いや～、女の子が増えるのは大歓迎ですわぁ」
藍「・・・・・ギン」

市「なんでしょか？」
藍「・・・あの子は、男の子だよ」
市「・・・・ホンマですか？」
藍「あぁ、本当だ」
市「あら～、あまりにも綺麗な顔してはるもんやから、女の子かと思ってましたわ」
藍「ギンはこう言う子がタイプなのかい？」
市「僕はぁ、綺麗な子ぉが好きなんですわぁ。あと、ちっこい子もいいですなぁ」
藍「ギン・・・・なんだか楽しそうだね」
市「そぉですかぁ？」
藍「顔がいつもより笑っているよ」
市「いつもよりって、藍染はんも僕の事、そんな目で見てはったんですか？」
藍「そのようにしか見えないよ」
市「・・・・・今日はよくしゃべりはりますね」
藍「何か言ったかい？」
市「・・・・いいえ」

藍染に黒い笑みで見られ、市丸は黙った。
そして、本題に戻る。

市「この子ぉ、拉致って、すぐに仲間にしはるつもりですか？」
藍「いや、この子の場合、ゆっくりいった方がいいかもしれない。それに・・・」
市「？・・・」
藍「今は、やめておいた方がいい」
市「意味、分からんのですけど・・・？」
藍「・・・後で話してあげるよ」
市「？？・・・」

市丸の頭の上にはハテナマークが浮かんでいた。
不適に笑う藍染。いったい何をしようと言うのか。

～瀞霊廷～

此処は四番隊・綜合救護詰所。
その廊下を1人の少年が歩いていた。

日「ったく、松本の奴・・・こんな時に二日酔いってありえないだろ」

護廷十三隊・十番隊隊長、日番谷冬獅郎。
日番谷は、ある病室に向かっていた。

日「・・・唯白の病室は、此処かぁ」

唯白亜希は、初任務で報告には無かった虚が出現し、一人だけ生き残ったのだ。亜希の傷は、それほど深くは無かったが、なかなか目を覚まさず、安静のため病室に寝かせているのだ。

そして今日、亜希が目を覚ました。その報告を受けて日番谷は今、病室の前に居るのだ。乱菊は二日酔いで断念。

コンコン

日「日番谷だ、入るぞ」

日番谷は中へ入って行った。
すると目にしたのは、体を起こして空を眺めている亜希。

日「起きていたのか・・・・・体の調子はどうだ？」
亜「・・・・・・・・」
日「？・・・おい、聞いてんのか」

反応しない亜希を不思議に思い、肩に手を置き、自分の方を向かせた。

日「おい、唯し・・・・！」

亜希の顔を見た途端、日番谷は驚き、固まった。
正確に言えば、目を見て・・・・

日「・・・ゆ、唯白・・・・お前、その目・・・」

亜希の目は左右違う色の、銀朱色と群青色だった。
しかし今は、その色が黒く濁っており、誰の事の見えていないかのような目をしていた。

日「唯白・・・・・」
亜「・・・・・・日番谷、隊長・・・」
日「！！・・・・・・俺の事、見えてるか？」
亜「・・・・はい」
日「そうか・・・よかった」

日番谷はホッとして、近くにあった椅子に座った。

日「早速で悪いんだが、任務で何があったのか話してもらえるか」
亜「！・・・・・はい」

亜希はゆっくり話し始めた。
そして数時間が経過して、やっと話し終わった。

日「・・・・なるほど、よく話してくれた」
亜「・・・・はい」
日「・・・・・俺は今日、これで帰る。明日には退院らしいな。今日はゆっくり休めよ」

日番谷は椅子から立ち上がり、扉に向かおうとした。しかしそれは止められた。それは・・・

日「唯白・・・？」

亜希が日番谷の隊首羽織を掴んだからである。

亜「・・・・・・」
日「・・・・？」
亜「・・・・・に・・・・・い、で・・・・」
日「？」

よく聞き取れなかった日番谷。耳を澄ませてみた。

亜「・・・1人にしないで・・・」
日「！・・・・・唯白・・・」

亜希の目はまだ薄黒く濁っているままだが、その奥には確かに、

寂しさがあった。

亜「・・・・・すみません。・・・・何でもありません」

そして手を離し、俯いた。

日「・・・・・・・・」

日番谷は俯いている亜希を一瞬見た後、静かに病室を出て行った。

日「・・・・・俺に何が出来るって言うんだよ・・・！」

病室を出た後、扉の前で頭を抱えて唸る日番谷。

亜希のために何が出来るか。

第１０話「１人の孤独」（後書き）

藍染達があんな話ししてたら面白いですよね～！
まあ、ありえないかもしれませんけど
後半はシリアスみたいな？

第１１話「可愛い奴」（前書き）

この話しでは、やちると日番谷が出てきます
２人の会話がたぶん面白く出来たと思います
それではどうぞ～！

第１１話「可愛い奴」

「ひっつ～ん！あ～そ～ぼ～！」

次の日の朝、十番隊の廊下を小さな女の子が猛ダッシュで走っていた。そして、日番谷に勢いよく突
進したのであって。

日「草鹿・・・・今は忙しい」

と言いながら避ける日番谷。避けられてもニコニコしている小さな女の子。

護廷十三隊・十一番隊副隊長、草鹿やちる。桜色の髪に、１０９ｃｍと言う小柄な体ながら、試験も何も
受けないで、十一番隊の副隊長になったほどの実力の持ち主である。可愛い顔をしているが腹黒であ
る。

草「え～！何で～！」
日「・・・・とりあえず忙しい」
草「け～ち～！」
日「更木とでも遊んでろ」
草「だって、剣ちゃん、いっちーの霊圧したってすぐどっか行っちゃたんだもん」
日「黒崎の？・・・・・・暇な奴だな」
草「私も暇だよ～！だから遊んで！」
日「駄目だ」

草「じゃあ着いていく～！」

そう言うとやちるはピョンピョン跳ねて、日番谷に抱きついた。

日「・・・・降りろ」
草「いや」
日「落とすぞ」
草「落とされないもん！」

やちるは力を込めて抱きついた。

日「く、苦しい・・・！」
草「じゃあ着いて行っていい？」
日「・・・・分かった・・・っ・・・着いて来ていいから離せ・・・！」
草「やった～！」

喜びのあまり大声を出してクルクル回るやちる。日番谷はそれを見てため息をついた。

草「ねえ、どこに行くの～？」
日「・・・・・唯白の部屋」
草「唯白～？誰それ～。ひっつんの彼女～？」
日「ちげえよ。唯白亜希、正真正銘の男だ」
草「な～んだ、彼女じゃないんだ～！」
日「・・・・悪かったな、彼女いなくて」
草「でも逆にいたら、爆笑しちゃうけどね～！」
日「・・・・どっちにしろ俺は、彼女なんてつまらんものつくらん」
草「つまらなくないよ～？いろんな所に行ってイチャイチャしたり、お店でご飯を食べたり食べたり」

日「今、食べたりって2回言ったぞ」
草「気のせいだよ～！」
日「よだれ出てんぞ」

何を想像したのかやちるの口からは、大量のよだれが垂れていた。
たぶん食べ物の事だろう。いや、
食べ物の事だ。

日「とりあえず俺は唯白の部屋に行く」
草「あっ、待って～！」
日（やっぱり着いて来んのかよ）

2人は亜希に部屋に向かって歩き出した。
その間もやちるは騒がしかった。

数分歩いていると、日番谷が1つの部屋の前で止まった。

草「此処がゆいっちーの部屋？」
日「・・・・あぁ」

もう亜希のあだ名は決まっていたらしい。やちるは、人にあだ名を付けるのが好きだ。
日番谷はひっつー、乱菊はらんらんとなる。その他にもたくさんの死神達にあだ名がある。ときどき
忘れる。

草「早く入ろ～！」
日「・・・・・・・」

日番谷は無言で部屋の扉を開けた。

すると亜希は、窓に寄りかかって寝ていた。

日「・・・・寝てる・・・」

草「ねえねえ、どうしたの～？」

日番谷がいきなり止まり前が見えいやちる。何を見たのかが気になり、前に無理やり出た。

出た瞬間やちるは・・・・

草「女の子だ～！やっぱり彼女いたんじゃん！ひっつんの嘘吐き～！」

日「嘘じゃねえ。あいつは男だ」

草「え～～。でも女の子に見えるよ～？」

日「確かに綺麗な顔しているが、唯白は男だ」

草「ちぇ～、ひっつーの秘密見つけたと思ったのに～」

日「・・・・・・あれじゃあ風邪ひくな・・・」

日番谷は亜希に近づき、ゆっくりベットに寝かせてあげた。

すると、やちるがひょこっと出てきて・・・

草「「ひっつー優しいね。ゆいっちー気持ち良さそうに寝てるよ」

日「・・・・俺は優しくねえよ。これが普通だ」

草「ひっつー照れてる～！」

日「照れてねえ」

草「絶対照れてるよ～！だってこっち向かないじゃん」

日「・・・・・うるせえ奴」

草「うるさい奴ってひっど～い！そう言う時は可愛い奴でしょ！」

日「テメエなんざ可愛くねえよ」

草「え～～。らんらんは可愛いって言ってくれるよ～？」

日「松本と一緒にすんな」

草「ひっつーに可愛いって言われた事ない～！ねえ、言って！」
日「なんで俺が言わなきゃいけねえんだよ。松本に言ってもらえ」
草「らんらんには何回も言ってもらってるもん」
日「俺は言わねえ」
草「言わないんだったら、ゆいっちーにちゅーしちゃうよ～？」

亜希の顔に自分の顔を近づけるやちる。

日「・・・・変態かよお前」
草「変態じゃないもん。これはスキンシップだもん」
日「なるほど、変態がやるスキンシップなんだな」
草「違うって～！普通の人がするスキンシップだよ～！」
日「テメエが普通の人って・・・・無理があるだろ」
草「ひっつーひど～い！私そんな子に育てた覚えは無いよ！」
日「育てられた覚えもねえよ」
草「おっ、ひっつーいいツッコミだね！」
日「・・・あまり大声出すな。唯白が起きるだろ」
草「じゃあさぁ、可愛いって言って？」
日「・・・・・・・・」
草「ねえ～」
日「・・・・・・・ちっ」
草「早くっ！」
日「・・・・可愛い奴・・・」

ぼそっと言う日番谷。それを聞き逃さなかったやちる。

草「やった～！ひっつーに可愛いって言われた～！」

ピョンピョン跳ね回るやちる。

日「・・・・言ったんだからもういいだろ。唯白は寝てるから、もう帰るぞ」
草「は～い！」
やけに素直なやちる。２人は仲良く？自分の隊舎の執務室に戻って行った。

第１１話「可愛い奴」（後書き）

やっぱり、やちると日番谷のペアは外せないでしょ～！
あの２人は良いペアですよね！

また、この２人の話を書いてみたいです

第１２話「君の笑顔に」（前書き）

笑顔は大切です
と言っても、私は笑顔なんてあまり見せませんけど
日番谷の笑顔もあまり見た事無いですよね～
いつも、眉間にしわを寄せているから

第１２話「君の笑顔に」

声がする。とても心地良い声が・・・・・・

うるさいぐらいの声なのに、何故か安心する。

この声は、誰なのだろう――――――

亜希は夕日の光りが強い、静かな夕方に目を覚ました。

亜「・・・・・朝、誰か此処に居たのか・・・？」

わずかだが霊圧が残っている。日番谷とやちるの霊圧だ。

そんな事も知らず亜希は、部屋を出て、外へ向かった。

外に出ると、瀞霊廷の真っ白い建物にオレンジ色の夕日の光が当たり、誰もが息をのむ光景が目に入
った。

亜「綺麗・・・・」

亜希は屋根の上に座りながら呟いた。

そして、もうこの光景を目にする事が無いかのように、目にやきつけていた。

「こんな所に居たのか」

静かな声で背後から話しかけられ、振り返る亜希。そこには・・・

亜「日番谷隊長・・・」

亜希は今にも消えそうな声で言い、背後に立っている日番谷を見上げた。

亜「なんで此処に・・・」

日「お前なら此処に居ると思ったからだ」

亜「なぜ分かったんですか・・・？」

日「お前はいつも、空を見ていた・・・・」

亜「・・・・・・・」

日「まるで、そのまま空に吸い込まれるかのように」

亜「・・・！」

日「俺は、いつか本当に消えるんじゃないかって心配なんだ」

日番谷は亜希の隣に座って空を見上げた。

亜「・・・・・俺の心配なんかしなくてもいいですよ。俺に関わったら皆・・・・」

日「・・・・お前のせいじゃねえだろ。そんなの偶然って言うのもあるんだぞ？」

亜「俺は、偶然と思った事がないです。いや、思えないんです。皆いつも俺の目の前で・・・・死んで

いく」

わずかに目を細める亜希。

日「・・・偶然じゃなければ必然なのか・・・」
亜「必然・・・・そうかもしれませんね」
日「唯白・・・・お前は本当に全てが自分のせいだと思うのか？」
亜「・・・はい」
日「すべてお前のせいだとしても、それを全部お前だけでかかえていいと思ってんのか？」
亜「え・・・？」

日番谷の言葉に疑問に思い、日番谷の方を見た。
2人の目と目が絡み合う。

日「どうせ自分の事だから、自分1人で一生かかえていくつもりなんだろ？」
亜「・・・・・・・」
日「俺もお前と同じで、1人で何かをかかえていた事があった」
亜「・・・隊長も・・・？」
日「あぁ、俺は昔、真央霊術院時代の頃に、俺も周りから避けられていた。この珍しい銀髪と目のせい
で」
亜「・・・・・・・」
日「でもその時、1人だけ俺には親友と言える奴が居た。そいつと出合ってから、最悪な毎日が変わっ
たんだ。俺達はいつも一緒に居た。
でもそんな日は長くは続かなかったんだ。俺はある日とうとう自分のオリジナルの斬魄刀を手に入
れたんだ。手に入れなければよかったのかもしれない」
亜「・・・？」
日「その俺のただ1人の親友も同じ斬魄刀を手に入れていたんだ」
亜「・・・・同じ斬魄刀・・・」

日「俺の斬魄刀は氷雪系最強の斬魄刀。その斬魄刀が2振りある事を四十六室は認めなかった。そして
俺達2人を戦わせてどちらが所有者にふさわしいか決めたんだ。その結果、俺が所有者として決ま
ったんだ」
亜「・・・・もう1人の人はどうなったんですか？」
日「・・・・・・殺された」
亜「！！・・・・」
日「・・・俺は必死に止めようとした。でも駄目だった。それを俺はずっとその日から悔いていた。俺
が殺したようなもんだからな」
亜（・・・・・俺と同じ・・・）

亜希は自分の手をぎゅっと握った。日番谷の目からはその時と同じであろう、悔しさが滲み出てい
た。

日「でも・・・・死神になって、仲間が出来た」

日番谷の表情は優しいものへと変わっていった。

日「護廷にはたくさんの奴が居る。一人ひとり性格も接し方も違うが、自分なりの優しさで励ましてく
れる」
亜「・・・・・・・・」
日「俺も最初は死神が嫌いだった。それが、あいつ等と一緒にいるとそんな気持ちが和らいでいったん
だ」
亜「・・・・・・・・」
日「きっとお前も、これからそうなると思うすぐには無理かもしれ

ねえが、俺達がお前を闇から解放し
てやる」

日番谷は真剣な顔で亜希に言った。

亜「・・・・そんな事、出来るんですか・・・？」
日「絶対解放してやる。たとえ俺が闇に落ちたとしても」、必ず」
亜「！・・・・・ありがとう、ございます」
日「・・・・！・・・・・良い笑顔じゃねえか」

日番谷の視線の先には、いままで誰にも見せた事が無いくらい、満面の笑顔の亜希が居た。

薄黒かった目もいつもの色を取り戻していった。そして、その目からは涙が流れていた。涙を流すと
は思わなかった日番谷は驚いていたが、涙が出るくらい嬉しいのだと言われ、笑みをこぼす。

亜「俺・・・・こんな事言われたの初めてです。こんなに涙が出るほど嬉しい事も。真央霊術院に居た
頃の初めて友達が出来た時よりもとても嬉しく感じます」
日「そうか・・・・それはよかったな・・・」
亜「ありがとうございます・・・！」

すると日番谷はいきなり立ち上がり亜希に言った。

日「無理して敬語使わなくてもいいからな。お前は、お前のやり方でやっていけば良い」

前から敬語を無理して使っている亜希に気づいていた日番谷は、

今日それを亜希に言った。

亜「・・・・それでは・・・・・・それじゃぁ、・・・・・冬獅郎・・・・」

日「あぁ、これからよろしくな。・・・・・・・亜希」

第１２話「君の笑顔に」（後書き）

亜希と日番谷の２人の話です

次の話しからは、ギャグ系を増やしていきます！

第13話「何があったんですか？」（前書き）

この話しは日番谷と亜希、乱菊の話しです
三人の話しに注目して楽しんでください！

第13話「何があったんですか？」

十番隊の執務室の前で乱菊は固まっていた。なぜ執務室の前で固まっているかと言うと、執務室の中
から聞こえる2人の会話に原因があった――――――

日「ったく、松本の奴、ちょっと休憩してくるって言ってたくせにどんだけ長げえんだよ・・・」
亜「落ち着けって冬獅郎。いつもの事なんだろ？なら、これからも我慢していくしかねえだろ」
日「・・・他の奴はともかく、松本の場合、時々・・・・というか、ほとんど我慢できなくなるんだよ。
　仕事はサボるは、仕事をしてもすぐに寝たり、酒飲んだりするから、疲労が溜まるんだよ」
亜「まぁ、冬獅郎の事を見ていれば一目で分かるぜ。此処にいつもしわ寄せてんもんな」

亜希は人差し指を日番谷のしわが寄っている眉間に押し付けた。

日「・・・・これはいつもだ。からかってんのか、亜希？」
亜「冗談だ。それくらい察しろよ」
日「何が察しろだ。テメエのは分かりにきいんだよ」

日番谷は亜希の人差し指を掴み力を入れた。

亜「・・・・痛い・・・」
日「痛くしてんだよ」
亜「・・・・・・書類の処理手伝うから離せ」
日「・・・・・・・・」

ゆっくり力を抜く日番谷。そして亜希はやっと離してもらえたと思ったら、ソファーに座り、書類
に手をかけハンコを押し始めた。

日「・・・・亜希、お前・・・俺より出来んじゃねえか？」
亜「そうか？」

亜希の手元は、ものすごいスピードで動いていた。もちろん日番谷もすごいスピードだ。しかし亜希
の方が速いようだ。

日「まぁ、・・・・松本よりは出来るよな、絶対」
亜「それ、褒めてるんだよな？」

2人は話しながら手は動いていた。
しかしその話しと手は扉が勢いよく開く音で止められた。

亜「・・・ん？」
日「・・・・・松本・・・遅ぇぞ」

執務室にさっきまで扉の前で固まっていた乱菊が入って来た。

松「・・・・隊長・・・」
日「何だよ・・・？」

乱菊は日番谷の前に歩み寄り言った。

松「・・・何があったんですか・・・」
日「？・・・・何がだよ・・・」
松「・・・・隊長が亜希って名前で呼んでるし、亜希君も冬獅郎って言ってるし、敬語じゃないし、な
　んかすごい友達感覚で話してるし、しかも2人共なにげに私の事けなしてるし・・・」
日「・・・・・・・・・」

　早口で言いきった乱菊を日番谷は黙って見ていた。すると亜希は日番谷の近くに寄って行って、乱菊
　に言った。

亜「・・・やっぱり、敬語じゃないと駄目・・・ですか？」

　自分より身長が大きい乱菊を見上げて言った亜希。自分より大きい乱菊を見上げているので、上目遣
　いになる亜希。それを見て乱菊は・・・・

松（か、かわいい・・・！）
亜「・・・？」
日「・・・・・・・」

　亜希は無意識にやっているため、乱菊の様子にも気が付かない。日番谷は、その様子を見てため息を
　ついた。

日「別にいいだろ。お前だってこっちの方がいいだろ？」
松「そ、それは、そうですけど・・・・」
日「・・・俺もこっちの方が嬉しい。早く俺達に慣れて気持ちを落ち着かせてやりたいしな」

松「隊長・・・・・そうですよね。・・・・よしっ！」

何がよしっ！なのか乱菊は亜希に近づいて行った。

亜「・・・？」

松「・・・私の事、乱菊って呼んでくれると嬉しいなぁ」

亜「え・・・？」

松「だ～か～ら！私にも敬語はいらないわ。今日から乱菊って呼んで？」

亜「え・・・・いや、でも・・・」

松「何よ～、隊長はよくて私は駄目だって言うの～？」

亜「いや、そう言う事じゃなくてですね、・・・冬獅郎はなんか見た目が子供だし、話しやすい」

日「俺は子供じゃねえ・・・！」

松「まあまあ、いいじゃないですか。本当の事ですし」

日「松本テメエ・・・！」

日番谷は拳を震わせて、今にも飛び掛りそうな気持ちを押さえ込んだ。

松「・・・隊長が一番なんですよ、たぶん。死神に対して興味を持ったのは隊長が初めてなんだと思います」

日「・・・・・・」

松「亜希君は、隊長と一緒に居たいと思っているんですよ。隊長と話している時の亜希君の顔は、とても楽しそうでした」

日「あんま変わってなかったような気がするけどな」

松「私にはそう見えました」

日「・・・・そうかよ・・・」

2人はぼけーとソファーに座っている亜希を見た。
亜希はそれに気づき乱菊に話しかけた。
亜「・・・・乱菊さん・・・さん付けでも良いか？」
松「・・・えぇ、それでもいいわよ。どっちにしろ嬉しい進歩よ！」
乱菊は亜希を抱きしめた。嬉しさのあまり力が入り、亜希は苦しそうだ。
亜「く、苦しい・・・っ・・・は、なせ・・・！」
松「あっ、ごめ～ん！。つい嬉しくて」
腕の力を緩め亜希を開放する乱菊。
亜「ゲホッ、ゲホッ・・・・っ・・・ハァ、ハァ・・・」
日「松本・・・お前は亜希の事殺す気か？」
松「そんなわけないじゃないですか～！」
日「テメエの場合は本当にやりそうなんだよ」
亜「・・・ハァ・・・まったくだよ・・・」
松「何で私が亜希君の事殺さないといけないんですか～。でも私の胸の中で死ねるなんて本望じゃないですか？」
亜「最悪としか思えない・・・」
日「そんなの喜ぶの檜佐木だけだ」
亜「檜佐木・・・？」
日「いずれ、会えればどんな奴か分かる」
亜「はぁ・・・」
亜希は楽しみんもような、そうじゃないような気持ちになった。

松「あっ、いつの間にかにお昼ですよ！隊長、亜希君！お昼食べましょ！」
日「俺は1人で・・・」
松「駄目です隊長！亜希君が悲しがっているじゃないですか！」
亜「いや、悲しんでいねえよ」
日「嘘言うんじゃねえよ、松本」
松「・・・・と、とにかく一緒に食べましょう！」

乱菊は日番谷と亜希の背中を押して執務室を出、お昼を食べに行った。日番谷と亜希は、しょうがないと言う顔で付いて行った。

第13話「何があったんですか？」（後書き）

どうでしたか？
日番谷と亜希のツッコミは？
しっかり書けているか分かりませんが、見てくれてありがとうございました！

第１４話「お嬢さん」（前書き）

檜佐木は少女に会ったのだ

少女？少年？
その正体は・・・

第１４話「お嬢さん」

ある日の昼時、檜佐木は三番隊隊舎・廊下を歩いていた。

檜「今日は非番だし、吉良とでも飲むか」

などと考えていると曲がり角で人とぶつかってしまった。ぶつかってしまった人物は尻餅をついた。

書類を持っていたのか書類が散らばっている。

檜「だ、大丈夫か？すまないお嬢さん」

檜佐木はその”お嬢さん″に手を差し出し立たせると書類を拾い始めた。

拾い終えた書類を”少女”に渡し、一言言って去ろうとする檜佐木。しかしその”少女”に呼び止められた。

「あの、三番隊の執務室って何処ですか？」

檜「え・・・あぁ、執務室ね。今俺も行くところだったんだよ。一緒に来るか？」

「はい、ぜひ」

檜「じゃあ、書類俺が持つよ。この量じゃ、お嬢さんも疲れるだろうし」

「・・・・・じゃあ、宜しくお願いします」

そして2人は三番隊の執務室に向かって歩いて行った。

数分歩いていると執務室に着いた。そして中に入った。

檜「吉良、入るぞ」

「はい、どうぞ」

中には山積みの書類と吉良イヅルが居た。

吉「檜佐木さん、どいしたんですか？」

檜「いや、俺は酒飲みに誘いに・・・・あと、このお嬢さんは・・・・」

「十番隊からの書類を届けに来ました」

吉「十番隊から・・・・分かりました。目を通しておきます」

檜「そう言えばお嬢さんの名前まだ聞いていなかったな」

「・・・・・・十番隊所属の、唯白亜希、男です」

檜「！？・・・お、男！？・・・マジかよ。女の子かと思っていた」

吉「檜佐木さん、そこも驚くところですが、気にする所はそこじゃありませんよ」

檜「・・・・・十番隊所属、唯白亜希・・・・・・・あ！」

吉「気が付きましたた。・・・・今年入って来た新人死神の唯白亜希。日番谷隊長よりも早く死神にな
った天才少年」

吉良が言い終えると同時に亜希の肩がピクッと動いた。天才と言う言葉が亜希にとっては嫌な言葉な
のだ。

亜「・・・・俺、もう戻ります・・・・」

檜「待てよ」

檜佐木は亜希の腕を掴み、亜希の動きを止めた。

亜「何ですか？」
檜「俺の名前は檜佐木修兵だ」
亜「え・・・・」
吉「僕は吉良イヅルです」
亜「あの・・・・」
吉「さっきは無神経な事を言ってしまってすみませんでした」
檜「天才って言う言葉が嫌だったんだろ？」
亜「・・・・・なんで分かったんですか？エスパーですか？」
檜「エスパーなわけねえだろ」
吉「見ていれば分かりますよ。すみませんね、檜佐木さんが」
檜「テメエが言ったんだろ。俺に罪をきせるな」
吉「あれ、そうでしたっけ？」
檜「さっき自分で謝っただろ」
吉「すみません。なんか最近、悪霊にとり付かれているみたいで」
檜「マジで・それってまさか、市ま・・・」
吉「言ったら檜佐木さんに僕がとり付きますよ？」
檜「すみません・・・」

2人のやり取りを見ていた亜希は、そのやり取りが可笑しくて、軽く笑ってしまった。

檜「やっと笑ったな」
亜「え？」
吉「亜希君、僕達の前で笑わないから、、心配で」
亜「じゃあ・・・今のは演技・・・ですか・・・？」
檜「いや、半分演技、半分本気だ」
吉「でも本当に良かったです。僕達にも笑った顔見せてくれて」
檜「笑顔じゃないけどな（笑顔が見たい・・・！）」

吉「檜佐木さん心の声が漏れてますよ」
檜「まじ・・・！？」
吉「それと亜希君は男だって言っているじゃないですか」
檜「べ、別に、女の子だって思ってないから。・・・ただ、もっと笑ったら、かわ・・・・・良い顔するだろうなぁ、・・・って思っただけだ・・・！」
吉（今、可愛いって言いかけた・・・）

また2人で話し始めたのを見て亜希は、黙って2人を見ていた。

吉「そうだ・・・僕の事は名前で呼んでください。その方が気楽に話せますし」
檜「お、俺も！俺も修兵って呼んでいいぜ！？」
吉「なんでそんなに必死なんですか。馬鹿ですか・・・？」
檜「馬鹿じゃねえよ。馬鹿はお前だろ」
吉「僕だって馬鹿じゃありません」
亜「どっちも馬鹿だろ」
檜「いきなりつっこまれた・・・」
吉「まあ、仲良くしてくれるっていう事じゃないですか・・・？」
亜「しょうがないから仲良くしてやるよ」
檜「いきなり偉そうになったな」
吉「そう言う性格なんでしょう」
檜「不器用な奴」
吉「檜佐木さんには言われたくないと思いますよ・・・？」
檜「んだと・・・！」
亜「確かに・・・」
檜「テメエも俺の事馬鹿にすんのか・・・！」
亜「してねえよ。テメエの勘違いだろ」

亜希は檜佐木を嘲笑うかのように笑った。

檜「・・・なんかコイツ、日番谷隊長に性格似てねえか？」
吉「確かに似てますね。あと、黒崎一護にも」
亜「黒崎一護？誰だそれ・・・」
檜「いずれ何処かで会うだろ。もしかしたら近いうちに」

どんな人だろうと考えている亜希。三人はこの後もしょうもない話しをしていた。

第１４話「お嬢さん」（後書き）

亜希を少女と間違える檜佐木。
本当に馬鹿ですね
この小説では檜佐木が馬鹿にされまくりという事にしました

次もお楽しみに！

第１５話「お姫様？」（前書き）

この話からはアランカル十刃が出てきます
やっぱり最初は人気のあの２人が出てきます
もちろん亜希も出てきます

第１５話「お姫様？」

心地良い風が吹く今日。
亜希は非番を利用して近くにある野原に行っていた。

近くと言っても流魂街のだが。
この野原は亜希が転生した場所だ。
そこで亜希は、スヤスヤと気持ち良さそうに寝ていた。

そこへ影１つ。

「・・・・こんな所に居たのか・・・」

静かに一言言った青年。
彼の名は、ウルキオラ・シファー。アランカル十刃の４だ。肌がとても白い。いつも無表情、無感情
で藍染の命令に従う。

ウル「・・・・・・・・」

ウルキオラは無言で、気持ち良さそうに寝ている亜希を抱き上げた。
お姫様抱っこで・・・

亜「・・・・・んっ・・・・・・ん～・・・」

抱き上げた事で目が覚めてしまったようだ。
目を覚まして、ウルキオラを見上げる亜希。

亜「？・・・・・誰ですか・・・・？」

1回も会った事も話した事も無い青年に抱き上げられていると言うのに、いたって冷静な亜希。

ウル「・・・・・ウルキオラ・シファーだ。・・・・・唯白亜希、貴様を虚圏に連れて行く」

亜「虚圏・・・？・・・・・なぜですか？」

ウル「・・・・・命令だからだ」

亜「・・・俺に何か、用でもあるんですか？」

ウル「用がなければ連れて行こうとはしない」

亜「それもそうですね」

ウル「・・・・・・・・」

パチンッ

無言で指を鳴らし、虚圏に行くための入り口を開けるウルキオラ。

ウル「時間をとり過ぎた。そろそろ行く・・・」

亜「え・・・・ちょ、ちょっとまっ・・・！」

有無うを言わせず虚圏に向かうウルキオラ。

そして数分もしない内に虚圏に着いた。

～虚圏・虚圏城～

亜「あの～・・・」
ウル「・・・・・・・」
亜「・・・・すみません。・・・・降ろしてもらえますか？」
ウル「駄目だ。降ろしたら逃げる気であろう」
亜「逃げません。別に悪い事しているわけでもないですし」

虚圏城の廊下を歩いていると、前方から1人の男が歩いてきた。

「・・・・・ウルキオラ・・・その女、誰だ・・・？」
ウル「・・・・貴様には関係無い」

話しかけて来た男の名は、グリムジョー・ジャガージャック。
彼はアランカル十刃の6だ。目つきが悪く、服装も見た目もヤンキーそのものだ。性格も悪い。

グリ「んだよ、その女誰でって聞いてるだけじゃねえか」
ウル「貴様には関係無いと言っている。目障りだ、去れ」
グリ「何ムキになってんだよ。・・・・・もしかしてその女・・・テメエの女か？」
ウル「・・・・言い間違えた、目障りだ、消えろ」

表情は変わっていないが、言葉の意味が強くなったウルキオラ。

グリ「なんだ・・・？図星か？」
ウル「消えろと言っている」
グリ「・・・・テメエは普通に会話もできねえのかよ」
ウル「なぜ貴様のようなクズと会話など・・・・それに、貴様に言われる筋合いは無い」
グリ「・・・どう言う意味だよ・・・」

睨み合うウルキオラとグリムジョー。グリムジョーが一方的に睨んでいるでけだが。

亜「・・・く、くる・・しい・・・・！」

ウル・グリ「・・・・？」

突然苦しそうな亜希の声が聞こえ、ウルキオラの腕の中に居る亜希を見る2人。

いつの間にかに手に力が入っていたウルキオラの腕の中で亜希は必死に声を出していた。

ウル「・・・・・・・」

ウルキオラは何も言わず、力を抜いた。

グリ「・・・・・つうか、死神なんか連れてきていいのかよ・・・？」

ウル「藍染様の命令だ」

グリ「・・・また命令かよ。・・・・・・・テメエ、名前なんて言うんだ・・・・？」

亜「・・・・？」

グリ「テメエの名前はなんだって聞いてんだよ」

亜「・・・・唯白亜希です」

グリ「亜希か・・・・・俺は、グリムジョーだ」

亜「・・・よろしくお願いします」

そしてやっと歩き出す三人。と言うか、2人。亜希は依然、ウルキオラの腕の中。

数分歩いていると、１つの大きな部屋に辿り着いた。そこにはウルキオラやグリムジョー以外の十刃
が居た。
奥には玉座に座る藍染と、いつもの笑みをはりつけている市丸が居た。

ウル「藍染様、唯白亜希を連れてまいりました」
藍「あぁ、ご苦労様、ウルキオラ。あと降ろしていいよ」
ウル「はい」

ウルキオラは藍染に言われ亜希をゆっくり降ろした。周りの視線が亜希に突き刺さる。

藍「さて、最初は自己紹介からしようか」
グリ「待てよ」
藍「・・・・何だい？グリムジョー」
グリ「・・・・この女なんのために連れてきたんだよ？しかも、いかにも弱そうな女を」

すると市丸がいきなり・・・
市「やっぱりそう見えるねんやなぁ」
グリ「はぁ？何言って・・・」

そして藍染。

藍「グリムジョー。その子は、男だよ」
グリ「なっ！？」

グリムジョーは驚き亜希の方を見た。周りの十刃も驚いていた。
全員亜希の事を女だと思っていたら
しい。ウルキオラ以外は。

そして、ウルキオラ以外の十刃は全員同じ事を思った。

（男にお姫様抱っこするかよ普通！？）

一同はウルキオラに痛いほどの視線をおくった。

第１５話「お姫様？」（後書き）

亜希はやっぱり女と間違えるくらい綺麗な顔をしているんですね

自分で書いたんですけどね

次もアランカル十刃が出てきます

すみません！（前書き）

事情がありまして終了です！

すみません！

亜「この小説の管理人の事情により今日で終わりです！」
日「なんで終わんだよ？」
亜「さあ？それは管理人に聞けよ。俺は知らねえ」
日「・・・・・適当すぎるだろ。主人公なんだから、もっとしっかりしろよ」
亜「でも、このアニメの主人公は黒崎一護だろ？」
日「・・・・なんで知ってんだよ・・・」
亜「松本さんに教えてもらった」
日「いつの間に・・・」
亜「主人公なのに、出番無かったな」
日「今頃、泣いてるかもな」
亜「可哀相に・・・」

松「隊長～！亜希く～ん！お茶はいりましたよ～！」

日「そろそろ終わりだな」
亜「ああ、それでは・・・」

《短い間でしたが、この小説を見てくださいましてありがとうございました！》
《これからも、たくさんの小説と廻り合ってたのしんでください！》
《本当にありがとうございました！》

すみません！（後書き）

いままで見て下さってありがとうございました！
中途半端ですが、本当に終了です！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0218q/

BLEACH～天使の誓い～

2011年10月8日14時47分発行